

## 基本計画書

基本計画書										
事項	記入欄							備考		
計画の区分	研究科の設置									
フリガナ設置者	ガクコホクシヨク ソカダガク									
フリガナ大学の名称	ソカダガク ガクイン									
大学本部の位置	東京都八王子市丹木町1丁目236番地									
大学の目的	創価大学大学院は、創立者池田大作先生の建学の精神に基づき、学校教育法により、学部基礎の上に、さらに高度にして専門的な学術の理論および応用を教授研究し、その深奥を究めて、広く文化の進展に寄与することを目的とする。									
新設学部等の目的	教育学研究科は、「人間教育の最高学府たれ」との建学の精神に基づき、人間の為によってもたらされた地球的問題群が複雑に絡み合う今後の世界において、人間尊重の文化の興隆・発展に貢献するため、教育学・心理学の分野に関する地球的視野に立った専門的な研究・教育を行うことをめざす。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地		
	教育学研究科 [Graduate school of Education]	年	人	年次人	人		年 月 第 年次	東京都八王子市丹木町1丁目236番地  同上		
	教育学専攻 [Division of Education] (博士前期課程) [Master's Program]	2	15	—	30	修士 (教育学) 【Master of Arts in Education】	令和4年4月 第1年次			
	教育学専攻 [Division of Education] (博士後期課程) [Doctoral Program]	3	2	—	6	博士 (教育学) 【Doctor of Philosophy in Education】	令和4年4月 第1年次			
計										
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)		文学研究科教育学専攻博士前期課程（廃止） 文学研究科教育学専攻博士後期課程（廃止）								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数				
		講義	演習	実験・実習	計					
	教育学研究科教育学専攻博士前期課程	45科目	14科目	7科目	66科目	31単位又は33単位				
教育学研究科教育学専攻	1科目	48科目	0科目	49科目	14単位					
教員	学部等の名称		専任教員等						兼任教員等	
			教授	准教授	講師	助教	計	助手		
	新設	教育学研究科 教育学専攻（博士前期課程）	8 (8)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	15 (15)	
		教育学研究科 教育学専攻（博士後期課程）	8 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	0 (0)	
		計	9 (9)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	13 (13)	0 (0)	— (—)	
	既	文学研究科 国際言語教育専攻（修士課程）	6 (6)	3 (3)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	9 (9)	
		国際平和学研究科 国際平和学専攻（修士課程）	6 (6)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	7 (7)	0 (0)	5 (5)	
経済学研究科 経済学専攻（博士前期課程）		20 (18)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	24 (22)	0 (0)	7 (5)		

組 織 の 概 要	法学研究科 法律学専攻 (博士前期課程)	15 (14)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	16 (15)	0 (0)	5 (5)
	文学研究科 英文学専攻 (博士前期課程)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (5)	0 (0)	0 (0)
	文学研究科 社会学専攻 (博士前期課程)	10 (10)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	10 (10)	0 (0)	0 (0)
	文学研究科 人文学専攻 (博士前期課程)	14 (13)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	16 (15)	0 (0)	3 (3)
	理工学研究科 情報システム工学専攻 (博士前期課程)	13 (11)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	17 (15)	0 (0)	2 (2)
	理工学研究科 生命理学専攻 (博士前期課程)	11 (9)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	12 (10)	0 (0)	0 (0)
	理工学研究科 環境共生工学専攻 (博士前期課程)	10 (7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	10 (7)	0 (0)	3 (3)
	経済学研究科 経済学専攻 (博士後期課程)	9 (9)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	0 (0)
	法学研究科 法律学専攻 (博士後期課程)	11 (11)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	11 (11)	0 (0)	0 (0)
	文学研究科 英文学専攻 (博士後期課程)	5 (5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (5)	0 (0)	0 (0)
	文学研究科 社会学専攻 (博士後期課程)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	7 (7)	0 (0)	0 (0)
	文学研究科 人文学専攻 (博士後期課程)	12 (11)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	12 (11)	0 (0)	0 (0)
	理工学研究科 情報システム工学専攻 (博士後期課程)	11 (9)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	13 (11)	0 (0)	0 (0)
	理工学研究科 生命理学専攻 (博士後期課程)	10 (8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	10 (8)	0 (0)	0 (0)
	理工学研究科 環境共生工学専攻 (博士後期課程)	9 (7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	9 (7)	0 (0)	0 (0)
	法務研究科 法務専攻 (専門職課程)	10 (10)	5 (5)	0 (0)	2 (2)	17 (17)	0 (0)	19 (19)
	教職研究科 教職専攻 (専門職課程)	8 (8)	4 (4)	0 (0)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	0 (0)
	計	126 (115)	10 (10)	1 (1)	2 (2)	139 (128)	0 (0)	— (—)
	合計	135 (124)	14 (14)	1 (1)	2 (2)	152 (141)	0 (0)	— (—)
教員以外の職員 の概要	職 種	専 任		兼 任		計		
	事 務 職 員	176 (176)	人	70 (70)	人	246 (246)	人	
	技 術 職 員	4 (4)		1 (1)		5 (5)		
	図 書 館 専 門 職 員	7 (7)		1 (1)		8 (8)		
	そ の 他 の 職 員	0 (0)		27 (27)		27 (27)		
計	187 (187)		99 (99)		286 (286)			

校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計													
	校 舎 敷 地	263,071.08㎡	0 ㎡	0 ㎡	263,071.08㎡													
	運 動 場 用 地	108,423.08㎡	0 ㎡	0 ㎡	108,423.08㎡													
	小 計	371,494.16㎡	0 ㎡	0 ㎡	371,494.16㎡													
	そ の 他	371,326.19㎡	0 ㎡	0 ㎡	371,326.19㎡													
合 計	742,820.35㎡	0 ㎡	0 ㎡	742,820.35㎡														
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計													
		163,314.59㎡ (163,314.59㎡)	0 ㎡ ( 0 ㎡)	0 ㎡ ( 0 ㎡)	163,314.59㎡ (163,314.59㎡)													
教 室 等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体												
	80室	94室	12室	13室 (補助職員 0人)	1室 (補助職員 0人)													
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称		室 数														
		教育学研究科 教育学専攻		13 室														
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体で共用分 図書： 960,000冊 (960,000冊) 雑誌： 6,100種 (6,100種)										
	教育学研究科 教育学専攻	960,000 [230,000] ( 960,000 [230,000] )	6,100 [1,200] ( 6,100 [1,200] )	9,500 [9,400] ( 9,500 [9,400] )	10,500 (10,500)	936 (936)	0 ( 0 )											
	計	960,000 [230,000] ( 960,000 [230,000] )	6,100 [1,200] ( 6,100 [1,200] )	9,500 [9,400] ( 9,500 [9,400] )	10,500 (10,500)	936 (936)	0 ( 0 )											
図 書 館		面積	閲覧座席数	取 納 可 能 冊 数				大学全体										
		8,763.80 ㎡	1,200 席	1,035,727 冊														
体 育 館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要						大学全体									
		13,585.06 ㎡	陸上競技場、野球場、ラグビー場															
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	教 育 学 研 究 科 教 育 学 専 攻	経 費 の 見 積 り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次								
			教員1人当り研究費等		430千円	430千円	－千円	－千円	－千円	－千円								
			共同研究費等		0千円	0千円	－千円	－千円	－千円	－千円								
			図 書 購 入 費	0千円	0千円	－千円	－千円	－千円	－千円									
			設 備 購 入 費	0千円	0千円	－千円	－千円	－千円	－千円									
	学 生 1 人 当 り 納 付 金	専 修	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次										
									教育学	820千円	620千円	－千円	－千円	－千円	－千円			
									臨床心理学	920千円	720千円	－千円	－千円	－千円	－千円			
									学生納付金以外の維持方法の概要		経常費補助金、寄付金、資産運用収入							
教 育 学 研 究 科 教 育 学 専 攻	経 費 の 見 積 り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次									
		教員1人当り研究費等		430千円	430千円	430千円	－千円	－千円	－千円									
		共同研究費等		0千円	0千円	0千円	－千円	－千円	－千円									
		図 書 購 入 費	0千円	0千円	0千円	－千円	－千円	－千円										
		設 備 購 入 費	0千円	0千円	0千円	－千円	－千円	－千円										
学 生 1 人 当 り 納 付 金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次												
							710千円	510千円	510千円	－千円	－千円	－千円						
							学生納付金以外の維持方法の概要		経常費補助金、寄付金、資産運用収入									
大 学 の 名 称		創価大学																
学 部 等 の 名 称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地										
	年	人	年次人	人		倍												
	経済学部																	
	経済学科	4	190	3年次18	796	学士 (経済学)	1.03	昭和46年度	東京都八王子市丹木町1丁目236番地	平成30年度 定員変更(△10、 3年次編入8)								
法学部																		
法律学科	4	240	3年次8	976	学士 (法学)	1.03	昭和46年度		平成30年度 定員変更(△10、 3年次編入8)									
文学部																		
人間学科	4	350	3年次40	1480	学士 (文学)	1.02	昭和46年度		平成30年度 定員変更(△20、 3年次編入40)									



英文学専攻	2	10	—	20	修士 (英文学)	0.00	昭和50年度	
社会学専攻	2	10	—	20	修士 (社会学)	0.65	昭和50年度	
教育学専攻	2	15	—	30	修士 (教育学)	0.66	昭和61年度	令和3年学生募集停止
人文学専攻	2	8	—	16	修士 (人文学)	0.75	平成4年度	
理工学研究科						0.68		
情報システム工学専攻	2	30	—	60	修士 (工学)	1.08	平成7年度	
生命情報工学専攻	2	—	—	—	修士 (工学)	—	—	令和2年学生募集停止
環境共生工学専攻	2	25	—	50	修士 (工学)	0.72	平成19年度	
生命理学専攻	2	15	—	30	修士 (理学)	0.67	令和2年度	
[博士後期課程]								
経済学研究科								
経済学専攻	3	5	—	15	博士 (経済学)	0.06	昭和52年度	
法学研究科								
法律学専攻	3	3	—	9	博士 (法学)	0.66	昭和52年度	
文学研究科						0.21		
英文学専攻	3	5	—	15	博士 (英文学)	0.00	昭和52年度	
社会学専攻	3	5	—	15	博士 (社会学)	0.13	昭和52年度	
教育学専攻	3	2	—	6	博士 (教育学)	0.66	平成元年度	
人文学専攻	3	4	—	12	博士 (人文学)	0.08	平成6年度	
理工学研究科						0.67		
情報システム工学専攻	3	4	—	12	博士 (工学)	0.58	平成9年度	
生命情報工学専攻	3	—	—	—	博士 (工学)	—	—	令和2年学生募集停止
環境共生工学専攻	3	5	—	13	博士 (工学)	0.84	平成19年度	令和2年定員変更(2)
生命理学専攻	3	5	—	15	博士 (理学)	0.60	令和2年度	
[専門職学位課程]								
法務研究科								
法務専攻	3	28	—	84	法務博士 (専門職)	0.58	平成16年度	
教職研究科								
教職専攻	2	25	—	50	教職修士 (専門職)	0.58	平成20年度	
大学の名称	創価女子短期大学							
学部等の名称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定員 超過率	開設 年度	所在地
国際ビジネス学科	2	250	—	500	短期大学士 (国際ビジネス)	0.70	昭和60年度	東京都八王子市丹木町1丁目236番地
英語コミュニケーション学科	2	—	—	—	短期大学士 (英語コミュニケーション)	—	昭和60年度	平成30年学生募集停止
名称		平和問題研究所						

附属施設の概要

目的：平和の達成に関する諸問題の調査・研究

設置年月：昭和51年4月

規模等：建物 46.42㎡（文系校舎C棟内の5階501）

設置場所：東京都八王子市丹木町一丁目236番地

名称：比較文化研究所

目的：日本及び世界の文化に関する諸問題の比較研究

設置年月：昭和56年11月

規模等：建物 46.40㎡（文系校舎C棟内の4階402）

設置場所：東京都八王子市丹木町一丁目236番地

名称：生命科学研究所

目的：生命並びにそれに関連する諸問題についての科学的な研究

設置年月：昭和63年12月

規模等：建物 1,783.00㎡（理工学部K棟）

実験室18室、研究室6室、教室1室、自習室2室、暗室2室、測定室2室、

洗浄室1室、遠心機室1室、培養室1室、分配調合室1室、貯蔵室1室、

廃棄物保管室1室、汚染検査室1室

※創価大学糖鎖生命システム融合研究所と共用

設置場所：東京都八王子市丹木町一丁目236番地

名称：国際仏教学高等研究所

目的：仏教の思想・哲学の特徴と現代的意義に関する研究

設置年月：平成9年4月

規模等：建物 811.90㎡（文系校舎C棟の2階）研究室9室、リファレンス室1室、書庫7室

設置場所：東京都八王子市丹木町一丁目236番地

名称：法科大学院要件事実教育研究所

目的：法科大学院における要件事実教育の充実と発展を図るための調査研究

設置年月：平成16年10月

規模等：建物 24.00㎡（本部棟校舎内の12階）

設置場所：東京都八王子市丹木町一丁目236番地

名称：池田大作記念創価教育研究所

目的：創価教育の思想と実践の研究

設置年月：平成18年4月

規模等：建物 1,218.00㎡（文系校舎内の8階）

設置場所：東京都八王子市丹木町一丁目236番地

<p>名 称：プランクトン工学研究所</p> <p>目 的：プランクトンの研究を通じて人々の生活、環境の改善を図る</p> <p>設置年月：令和2年9月1日</p> <p>規 模 等：建物 276.90㎡（理工学部RD棟）</p> <p>設置場所：東京都八王子市丹木町一丁目236番地</p>
<p>名 称：創価大学糖鎖生命システム融合研究所</p> <p>目 的：糖鎖生物学と糖鎖情報学を融合し、 生命科学からの本質的な問いに答えていく</p> <p>設置年月：令和3年1月1日</p> <p>規 模 等：建物 1,783.00㎡（理工学部K棟）※生命科学研究所と共用</p> <p>設置場所：東京都八王子市丹木町一丁目236番地</p>

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」, 「新設学部等の目的」, 「新設学部等の概要」, 「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず, 斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については, 共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科又は高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は, 「教育課程」, 「教室等」, 「専任教員研究室」, 「図書・設備」, 「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず, 斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は, 「教育課程」, 「校地等」, 「校舎」, 「教室等」, 「専任教員研究室」, 「図書・設備」, 「図書館」, 「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず, 斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には, 実技も含むこと。
- 6 空欄には, 「-」又は「該当なし」と記入すること。



日本教育思想史特論Ⅱ	1後		2		○								兼1
教育史資料特論Ⅰ	1前		2		○								兼1
教育史資料特論Ⅱ	1後		2		○								兼1
情報教育特論	1後		2		○			1					
学校心理学特論	1後		2		○								兼1
教育学演習Ⅲb	2前		2			○		5	2				
教育学演習Ⅳb	2後		2			○		5	2				
小計(24科目)	—	0	48	0		—		5	2				兼4

合計(33科目)	—	17	48	0		—		5	2				兼4
----------	---	----	----	---	--	---	--	---	---	--	--	--	----

学位又は称号	修士(教育学)	学位又は学科の分野		教育学・保育学関係									
--------	---------	-----------	--	-----------	--	--	--	--	--	--	--	--	--

卒業要件及び履修方法							授業期間等						
------------	--	--	--	--	--	--	-------	--	--	--	--	--	--

<p>【修了要件】 本専攻に2年(通算4学期)以上在学し、以下の履修方法で31単位以上を修得し、必要な研究指導を受けたうえ、修士論文または特定の課題(リサーチペーパー)についての研究の成果の審査及び最終試験に合格したものに修士の学位を授与する。</p> <p>【履修方法】 ＜修士論文作成者＞ 必修科目9科目17単位(研究指導科目「教育学演習Ⅰa～Ⅳa」は原則として各学期に1科目ずつ履修)、選択科目7科目14単位を履修し、修士論文を作成する。 ＜リサーチペーパー作成者＞ 必修科目9科目17単位(研究指導科目「教育学演習Ⅰa～Ⅳa」は原則として各学期に1科目ずつ履修)、選択科目7科目14単位以上を履修し、リサーチペーパー2本、または選択科目8科目16単位を履修し、リサーチペーパー1本を作成する。 (本専攻の履修科目の登録上限は12単位(学期))</p>	1学年の学期区分		2期	
	1学期の授業期間		15週	
	1時限の授業時間		90分	

(注)

- 1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科の設置又は大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科(学位の種類及び分野の変更等に関する基準(平成十五年文部科学省告示第三十九号)別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。)についても作成すること。
- 2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 5 「授業形態」の欄は、各授業科目について、該当する授業形態の欄に「○」を記入すること。ただし、専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目のうち、臨地実務実習については「実験・実習」の欄に「臨」の文字を、連携実務演習等については「演習」又は「実験・実習」の欄に「連」の文字を記入すること。
- 6 課程を前期課程及び後期課程に区分する専門職大学若しくは専門職大学の学部等を設置する場合又は前期課程及び後期課程に区分する専門職大学の課程を設置し、若しくは変更する場合は、次により記入すること。
  - (1) 各科目区分における「小計」の欄及び「合計」の欄には、当該専門職大学の全課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」に加え、前期課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」を併記すること。
  - (2) 「学位又は称号」の欄には、当該専門職大学を卒業した者に授与する学位に加え、当該専門職大学の前期課程を修了した者に授与する学位を併記すること。
  - (3) 「卒業・修了要件及び履修方法」の欄には、当該専門職大学の卒業要件及び履修方法に加え、前期課程の修了要件及び履修方法を併記すること。

教育課程等の概要																	
(教育学研究科教育学専攻臨床心理学専修博士前期課程)																	
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考			
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手				
必修科目	基礎科目	研究倫理	1前	1			○								兼3	共同メディア	
		小計(1科目)	—	1	0	0	—								兼3		
	演習(研究指導)		臨床心理学特論演習Ⅰ-1	1前	2				○		3	2					
			臨床心理学特論演習Ⅱ-1	1後	2				○		3	2					
			臨床心理学特論演習Ⅰ-2	2前	2				○		3	2					
			臨床心理学特論演習Ⅱ-2	2後	2				○		3	2					
	小計(4科目)	—	8	0	0	—			3	2							
選択科目	専門科目	臨床心理学特論Ⅰ	1前		2		○			1							
		臨床心理学特論Ⅱ	1後		2		○				1						
		臨床心理面接特論Ⅰ(心理支援に関する理論と実践Ⅰ)	1前		2		○			1							
		臨床心理面接特論Ⅱ(心理支援に関する理論と実践Ⅱ)	1後		2		○			1							
		臨床心理査定演習Ⅰ(心理アセスメントに関する理論と実践Ⅰ)	1前		2			○		1	1					オムニバス	
		臨床心理査定演習Ⅱ(心理アセスメントに関する理論と実践Ⅱ)	1後		2			○		2						オムニバス	
		心理統計法特論	1前		2		○								兼1		
		心理学研究法特論	1休		2		○								兼1	集中	
		認知心理学特論	1前		2		○								兼1		
		発達心理学特論	1前		2		○			1	1					オムニバス・共同(一部)	
		家族心理学特論(家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践)	1・2休		2		○								兼1	集中・隔年	
		犯罪心理学特論(司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開)	1前		2		○								兼1		
		精神医学特論(保健医療分野に関する理論と支援の展開)	1後		2		○			1							
		障害児心理学特論(福祉分野に関する理論と支援の展開)	1後		2		○				1						
		投映法特論Ⅰ	1前		2		○								兼1		
		投映法特論Ⅱ	1後		2		○								兼1		
		病院臨床心理学特論	1後		2		○								兼1		
		精神分析特論	1前		2		○			1							
		学校臨床心理学特論(教育分野に関する理論と支援の展開)	1前		2		○								兼1		
		心の健康教育に関する理論と実践	1後		2		○			1							
	産業・労働分野に関する理論と支援の展開	1後		2		○				1							

	小計 (21科目)	—	0	42	0	—	3	2					兼8
実習科目	臨床心理基礎実習Ⅰ	1前		1		○		2					オムニバス
	臨床心理基礎実習Ⅱ	1後		1		○	1	1					共同
	心理実践実習Ⅰ	1後		1		○	2						共同
	臨床心理実習Ⅰ (心理実践実習Ⅱ)	2前		1		○	3	1					共同
	臨床心理実習Ⅱ (心理実践実習Ⅲ)	2後		1		○	3	1					共同
	心理面接実践実習Ⅰ	2前		1		○	3	2					共同
	心理面接実践実習Ⅱ	2後		1		○	3	2					共同
	小計 (7科目)	—	0	7	0	—	3	2					
合計 (33科目)		—	9	49	0	—	3	2					兼8
学位又は称号	修士 (教育学)	学位又は学科の分野		教育学・保育学関係									
卒業要件及び履修方法							授業期間等						
<b>【修了要件】</b> 本専攻に2年 (通算4学期) 以上在学し、以下の履修方法で33単位以上を修得し、必要な研究指導を受けたうえ、修士論文についての研究の成果の審査及び最終試験に合格したものに修士の学位を授与する。 <b>【履修方法】</b> 必修科目5科目9単位 (研究指導科目「臨床心理学特論演習Ⅰ-1～Ⅱ-2」は原則として各学期に1科目ずつ履修)、選択科目12科目24単位を履修し、修士論文を作成する。 (本専攻の履修科目の登録上限は12単位 (学期))							1 学年の学期区分			2期			
							1 学期の授業期間			15週			
							1 時限の授業時間			90分			

(注)

- 1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科の設置又は大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校等の学科 (学位の種類及び分野の変更等に関する基準 (平成十五年文部科学省告示第三十九号) 別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。) についても作成すること。
- 2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 5 「授業形態」の欄は、各授業科目について、該当する授業形態の欄に「○」を記入すること。ただし、専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目のうち、臨地実務実習については「実験・実習」の欄に「臨」の文字を、連携実務演習等については「演習」又は「実験・実習」の欄に「連」の文字を記入すること。
- 6 課程を前期課程及び後期課程に区分する専門職大学若しくは専門職大学の学部等を設置する場合又は前期課程及び後期課程に区分する専門職大学の課程を設置し、若しくは変更する場合は、次により記入すること。
  - (1) 各科目区分における「小計」の欄及び「合計」の欄には、当該専門職大学の全課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」に加え、前期課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」を併記すること。
  - (2) 「学位又は称号」の欄には、当該専門職大学を卒業した者に授与する学位に加え、当該専門職大学の前期課程を修了した者に授与する学位を併記すること。
  - (3) 「卒業・修了要件及び履修方法」の欄には、当該専門職大学の卒業要件及び履修方法に加え、前期課程の修了要件及び履修方法を併記すること。

## 教育課程等の概要

(教育学研究科教育学専攻博士後期課程)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置						
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
必修科目	研究特別指導	1前	2			○			2						オムニバス
	小計(1科目)	—	2	0	0	—			2						
選択必修科目	研究指導科目														
	教育学特殊研究指導Ⅰ	1前		2			○		1						
	教育学特殊研究指導Ⅱ	1後		2			○		1						
	教育学特殊研究指導Ⅲ	2前		2			○		1						
	教育学特殊研究指導Ⅳ	2後		2			○		1						
	教育学特殊研究指導Ⅴ	3前		2			○		1						
	教育学特殊研究指導Ⅵ	3後		2			○		1						
	教育方法学特殊研究指導Ⅰ	1前		2			○		1						
	教育方法学特殊研究指導Ⅱ	1後		2			○		1						
	教育方法学特殊研究指導Ⅲ	2前		2			○		1						
	教育方法学特殊研究指導Ⅳ	2後		2			○		1						
	教育方法学特殊研究指導Ⅴ	3前		2			○		1						
	教育方法学特殊研究指導Ⅵ	3後		2			○		1						
	教育心理学特殊研究指導Ⅰ	1前		2			○		1						
	教育心理学特殊研究指導Ⅱ	1後		2			○		1						
	教育心理学特殊研究指導Ⅲ	2前		2			○		1						
	教育心理学特殊研究指導Ⅳ	2後		2			○		1						
	教育心理学特殊研究指導Ⅴ	3前		2			○		1						
	教育心理学特殊研究指導Ⅵ	3後		2			○		1						
	臨床心理学特殊研究指導Ⅰ	1前		2			○		1						
臨床心理学特殊研究指導Ⅱ	1後		2			○		1							
臨床心理学特殊研究指導Ⅲ	2前		2			○		1							
臨床心理学特殊研究指導Ⅳ	2後		2			○		1							
臨床心理学特殊研究指導Ⅴ	3前		2			○		1							
臨床心理学特殊研究指導Ⅵ	3後		2			○		1							
教科教育学特殊研究指導Ⅰ	1前		2			○		1							
教科教育学特殊研究指導Ⅱ	1後		2			○		1							

教科教育学特殊研究指導Ⅲ	2前		2		○		1					
教科教育学特殊研究指導Ⅳ	2後		2		○		1					
教科教育学特殊研究指導Ⅴ	3前		2		○		1					
教科教育学特殊研究指導Ⅵ	3後		2		○		1					
学習教授法特殊研究指導Ⅰ	1前		2		○		1					
学習教授法特殊研究指導Ⅱ	1後		2		○		1					
学習教授法特殊研究指導Ⅲ	2前		2		○		1					
学習教授法特殊研究指導Ⅳ	2後		2		○		1					
学習教授法特殊研究指導Ⅴ	3前		2		○		1					
学習教授法特殊研究指導Ⅵ	3後		2		○		1					
学校心理学特殊研究指導Ⅰ	1前		2		○		1					
学校心理学特殊研究指導Ⅱ	1後		2		○		1					
学校心理学特殊研究指導Ⅲ	2前		2		○		1					
学校心理学特殊研究指導Ⅳ	2後		2		○		1					
学校心理学特殊研究指導Ⅴ	3前		2		○		1					
学校心理学特殊研究指導Ⅵ	3後		2		○		1					
精神分析学特殊研究指導Ⅰ	1前		2		○		1					
精神分析学特殊研究指導Ⅱ	1後		2		○		1					
精神分析学特殊研究指導Ⅲ	2前		2		○		1					
精神分析学特殊研究指導Ⅳ	2後		2		○		1					
精神分析学特殊研究指導Ⅴ	3前		2		○		1					
精神分析学特殊研究指導Ⅵ	3後		2		○		1					
小計 (48科目)	—	0	96	0	—		8					
合計 (49科目)	—	2	96	0	—		8					
学位又は称号	博士 (教育学)			学位又は学科の分野			教育学・保育学関係					
卒業要件及び履修方法							授業期間等					
【修了要件】 本専攻に3年 (通算6学期) 以上在学し、以下の履修方法で14単位を修得し、必要な研究指導を受けた上で、博士論文の審査及び最終試験に合格したものに博士の学位を授与する。 【履修方法】 必修科目1科目2単位、選択必修科目6科目12単位 (研究指導科目「特殊研究指導Ⅰ～Ⅵ」は原則として各学期に1科目ずつ履修) を履修し、博士論文を作成する。							1学年の学期区分		2期			
							1学期の授業期間		15週			
							1時限の授業時間		90分			

(注)

- 1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科の設置又は大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科 (学位の種類及び分野の変更等に関する基準 (平成十五年文部科学省告示第三十九号) 別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。) についても作成すること。
- 2 私立の大学の学部若しくは大学院の研究科又は短期大学の学科若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

- 3 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 5 「授業形態」の欄は、各授業科目について、該当する授業形態の欄に「○」を記入すること。ただし、専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目のうち、臨地実務実習については「実験・実習」の欄に「臨」の文字を、連携実務演習等については「演習」又は「実験・実習」の欄に「連」の文字を記入すること。
- 6 課程を前期課程及び後期課程に区分する専門職大学若しくは専門職大学の学部等を設置する場合又は前期課程及び後期課程に区分する専門職大学の課程を設置し、若しくは変更する場合は、次により記入すること。
  - (1) 各科目区分における「小計」の欄及び「合計」の欄には、当該専門職大学の全課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」に加え、前期課程に係る科目数、「単位数」及び「専任教員等の配置」を併記すること。
  - (2) 「学位又は称号」の欄には、当該専門職大学を卒業した者に授与する学位に加え、当該専門職大学の前期課程を修了した者に授与する学位を併記すること。
  - (3) 「卒業・修了要件及び履修方法」の欄には、当該専門職大学の卒業要件及び履修方法に加え、前期課程の修了要件及び履修方法を併記すること。

授 業 科 目 の 概 要			
(教育学研究科教育学専攻教育学専修博士前期課程)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修科目 基礎科目	研究倫理	<p>本学大学院の全研究科で必修の計8回の講義からなる1単位科目である。研究競争の激化や情報量の飛躍的増大を背景として、近年剽窃や捏造、改竄といった研究不正が後を絶たない。そのような状況を踏まえ、大学院に入学して今後研究活動を行おうとしている学生が、何に注意して研究活動を行うべきかを理解し、正しい姿勢で研究活動に臨む態度を身につけることを目標とする。</p> <p>授業においては、公正研究推進協会が提供する「eAPRIN」の指定コースを受講させ、最新の映像教材等を活用しながらグループディスカッションを実施し、以下の授業担当者を中心に複数の兼任教員でファシリテーションを行う。</p> <p>(16 高橋 薫) (17 松森 秀幸) (18 三津村 正和)</p>	共同
	教育学研究法	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義と論文購読によって進める必修科目である。</p> <p>学問研究法には大きく、理論的研究法、歴史的研究法、実証的研究法、実験的研究法の4つがある。この授業では、実際にそれぞれの方法を使用した研究論文を購読しながら教育学研究の概略を学び、研究方法を身に付けることを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 牛田 伸一/8回) まず科学方法論史として、代表的な知識形式を概説する。 続いてとりわけ解釈学的知識形式に基づいて理論的研究方法と歴史的研究方法が駆使された論文を取り上げ、その関心、目的、方法という観点から講読する。</p> <p>(5 舟生 日出男/7回) 実証的研究方法と実験的研究方法のためのツールとして、統計的仮説検定に関する基本的な力を身につける。 パラメトリック検定、ノンパラメトリック検定のさまざまな手法を紹介し、これらの手法を用いた論文を取り上げて適用の仕方について実践的に学ぶ。</p>	オムニバス方式
	教育学原典講読	<p>前期課程1年春学期に開講される、テキストの輪講及び討論によって進める必修授業である。</p> <p>教育学・心理学に関する著名な書籍を原文で読むことにより、学問研究に必要な基礎的能力である文献収集力を養成し、先行研究を十分に理解することができるようになることを目標とする。</p> <p>教育学に関しては、デューイの『経験と教育』を古典である以上に、21世紀初頭の教育を考えるための手がかりとして読む。</p> <p>一方、心理学に関しては、マズローの『人間性の心理学 モチベーションとパーソナリティ』を読み、心理学の分野でのマズローの位置づけや自己実現的人間について考察したい。</p>	
演習(研究指導)	教育学演習 I a	<p>前期課程1年春学期に開講されるゼミナール形式の必修授業である。</p> <p>各学生が修士論文を作成する基礎となる能力を養うことを目標とする。</p> <p>7名の担当教員が以下の専門領域及び研究テーマのもと、文献購読や討論を通して実際の学問研究を紹介することにより、学生独自の研究への道筋をつける。</p> <p>(1 牛田 伸一)：専門領域は教育方法学、研究テーマは教授学と教育課程、科学方法論 (2 鈴木 将史)：専門領域は数学教育学、研究テーマは算数・数学カリキュラムの歴史と国際比較 (3 関田 一彦)：専門領域は教育評価、研究テーマは学習理論、教育方法と評価の在り方 (4 富岡 比呂子)：専門領域は教育心理学、研究テーマは子どもの学習と自尊感情、創価教育論 (5 舟生 日出男)：専門領域は教育工学、研究テーマは学習支援と情報技術活用 (9 井上 伸良)：専門領域は教育行政学、研究テーマは教育政策と教育経営、教育法制 (10 鶴田 真紀)：専門領域は教育社会学、研究テーマは社会としての学校、子どもの社会学</p> <p>なお、学生が自らの指導教員の授業を履修するとき「教育学演習 I a」と呼び、下記「教育学演習 I b」と合併開講する。</p>	

<p>教育学演習 I b</p>	<p>前期課程1年春学期に上記「教育学演習 I a」と同一内容で合併開講されるゼミナール形式の授業である。          学生が指導教員以外の授業を履修するとき「教育学演習 I b」と呼ぶ。          指導教員ではない教員の授業を受けることで、幅広い学問知識に触れるとともに、多様な学問研究の方法を知ることができる。各担当教員の専門領域及び研究テーマは以下のとおりである。          (1 牛田 伸一)：専門領域は教育方法学、研究テーマは教授学と教育課程、科学方法論          (2 鈴木 将史)：専門領域は数学教育学、研究テーマは算数・数学カリキュラムの歴史と国際比較          (3 関田 一彦)：専門領域は教育評価、研究テーマは学習理論、教育方法と評価の在り方          (4 富岡 比呂子)：専門領域は教育心理学、研究テーマは子どもの学習と自尊感情、創価教育論          (5 舟生 日出男)：専門領域は教育工学、研究テーマは学習支援と情報技術活用          (9 井上 伸良)：専門領域は教育行政学、研究テーマは教育政策と教育経営、教育法制          (10 鶴田 真紀)：専門領域は教育社会学、研究テーマは社会としての学校、子どもの社会学</p>	
<p>教育学演習 II a</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講されるゼミナール形式の必修授業である。          春学期の「教育学演習 I a、 b」に引き続き、文献講読や討論により修士論文作成のための基礎力を磨くことを目標とする。          7名の担当教員が以下の専門領域及び研究テーマのもと、各学生の研究能力をさらに伸ばすため、教員による解説だけでなく、討論を通じて学生が自ら独自の考察を行えるようにする。          (1 牛田 伸一)：専門領域は教育方法学、研究テーマは教授学と教育課程、科学方法論          (2 鈴木 将史)：専門領域は数学教育学、研究テーマは算数・数学カリキュラムの歴史と国際比較          (3 関田 一彦)：専門領域は教育評価、研究テーマは学習理論、教育方法と評価の在り方          (4 富岡 比呂子)：専門領域は教育心理学、研究テーマは子どもの学習と自尊感情、創価教育論          (5 舟生 日出男)：専門領域は教育工学、研究テーマは学習支援と情報技術活用          (9 井上 伸良)：専門領域は教育行政学、研究テーマは教育政策と教育経営、教育法制          (10 鶴田 真紀)：専門領域は教育社会学、研究テーマは社会としての学校、子どもの社会学          なお、学生が自らの指導教員の授業を履修するとき「教育学演習 II a」と呼び、下記「教育学演習 II b」と合併開講する。</p>	
<p>教育学演習 II b</p>	<p>前期課程1年秋学期に上記「教育学演習 II a」と同一内容で合併開講されるゼミナール形式の授業である。          学生が指導教員以外の授業を履修するとき「教育学演習 II b」と呼ぶ。          指導教員ではない教員の授業を受けることで、幅広い学問知識に触れるとともに、多様な学問研究の方法を知ることができる。各担当教員の専門領域及び研究テーマは以下のとおりである。          (1 牛田 伸一)：専門領域は教育方法学、研究テーマは教授学と教育課程、科学方法論          (2 鈴木 将史)：専門領域は数学教育学、研究テーマは算数・数学カリキュラムの歴史と国際比較          (3 関田 一彦)：専門領域は教育評価、研究テーマは学習理論、教育方法と評価の在り方          (4 富岡 比呂子)：専門領域は教育心理学、研究テーマは子どもの学習と自尊感情、創価教育論          (5 舟生 日出男)：専門領域は教育工学、研究テーマは学習支援と情報技術活用          (9 井上 伸良)：専門領域は教育行政学、研究テーマは教育政策と教育経営、教育法制          (10 鶴田 真紀)：専門領域は教育社会学、研究テーマは社会としての学校、子どもの社会学</p>	

	<p>教育学演習Ⅲa</p>	<p>前期課程2年春学期に開講されるゼミナール形式の必修授業である。年次を終えた各学生が自ら設定したテーマに関し、先行研究の調査、独自課題の選定と考察といった手法により、修士論文を目指した研究を行うことを目標とする。7名の担当教員が以下の専門領域及び研究テーマのもと、修士論文作成のための指導を行う。</p> <p>(1 牛田 伸一)：専門領域は教育方法学、研究テーマは教授学と教育課程、科学方法論  (2 鈴木 将史)：専門領域は数学教育学、研究テーマは算数・数学カリキュラムの歴史と国際比較  (3 関田 一彦)：専門領域は教育評価、研究テーマは学習理論、教育方法と評価の在り方  (4 富岡 比呂子)：専門領域は教育心理学、研究テーマは子どもの学習と自尊感情、創価教育論  (5 舟生 日出男)：専門領域は教育工学、研究テーマは学習支援と情報技術活用  (9 井上 伸良)：専門領域は教育行政学、研究テーマは教育政策と教育経営、教育法制  (10 鶴田 真紀)：専門領域は教育社会学、研究テーマは社会としての学校、子どもの社会学</p> <p>なお、学生が自らの指導教員の授業を履修するとき「教育学演習Ⅲa」と呼び、下記「教育学演習Ⅲb」と合併開講する。</p>	
	<p>教育学演習Ⅳa</p>	<p>前期課程2年秋学期に開講されるゼミナール形式の必修授業である。これまで教育学演習Ⅰ～Ⅲで取り組んできたことの集大成として、自ら設定したテーマに関する修士論文の作成を行うことを目標とする。学生は毎回の授業で自らの学問的研究成果を発表し、指導教員や他の学生らと討論を行うことにより、一定以上の水準をもつ修士論文に努める。7名の担当教員の専門領域と研究テーマは以下のとおりである。</p> <p>(1 牛田 伸一)：専門領域は教育方法学、研究テーマは教授学と教育課程、科学方法論  (2 鈴木 将史)：専門領域は数学教育学、研究テーマは算数・数学カリキュラムの歴史と国際比較  (3 関田 一彦)：専門領域は教育評価、研究テーマは学習理論、教育方法と評価の在り方  (4 富岡 比呂子)：専門領域は教育心理学、研究テーマは子どもの学習と自尊感情、創価教育論  (5 舟生 日出男)：専門領域は教育工学、研究テーマは学習支援と情報技術活用  (9 井上 伸良)：専門領域は教育行政学、研究テーマは教育政策と教育経営、教育法制  (10 鶴田 真紀)：専門領域は教育社会学、研究テーマは社会としての学校、子どもの社会学</p> <p>なお、学生が自らの指導教員の授業を履修するとき「教育学演習Ⅳa」と呼び、下記「教育学演習Ⅳb」と合併開講する。</p>	
<p>選択科目</p>	<p>専門科目</p> <p>教育方法学特論Ⅰ</p>	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。大学院での学びを始めるに当たり、教育学の研究対象と方法を学生が明確に意識・理解することを目標とする。教育者は教育場面のなかでさまざまな問題にぶつかる。すぐに解決し得ない問題については、教育者自らが、この問題でいったい何が問題なのかを追究し、それに対する解決方法を紡ぎださなければならない。詳述すれば、問題を教授学（教育方法学）の問題圏に位置させ、それまでの教授学の研究成果を参照しつつ、現実の問題の解決方法を思考と実際の行為において生み出すプロセスである。このプロセスを教育者が自ら歩むには、教授学の対象と方法について熟知することが必要である。絶えず生起する問題を、教育者自身の研究のテーマとして組み入れ、適切な教育方法を繰り出すには、そうした研究の対象と方法を学ぶことが大事である。本講義ではこのための教授学の対象と方法の大枠をレビューする。</p>	
	<p>教育方法学特論Ⅱ</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。「教育方法学特論Ⅰ」に続き、教育学の実際の研究方法について、論文講読を通して学ぶことを目標とする。教育場面で生起する諸問題に対応するためには、教師自身が自らの教育方法を作り上げる力量が不可欠である。この力量形成のためには、実際の問題場面に突き当たり、これを科学的な対象と方法の文脈にのっとり追究することが必要である。しかし、大学の講義の場面ではこの機会を確保するのは困難である。それゆえ、本講義では、すでにそうした問題にぶつかり、その解決を試みた結果として報告されている教授学（教育方法学）の研究論文を吟味して、その論文の著者がどんな問題にぶつかり、何を対象にどのような方法でその問題を解決しようしているのか、について把握することを試みる。</p>	

教育工学特論 I	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。教育工学的見地から、授業をデザインし、評価・改善するための方法論についての基礎的な理論や知見について学ぶことを目標とする。教授と学習、行動主義・認知主義、状況論的学習、知識観と能力観、インストラクショナルデザイン、学習活動のデザイン等の話題についてテキストをベースとしつつ、関連資料を調査・分析した結果を基に議論したり、授業をデザインすることを通して、理解を深める。</p>	
教育工学特論 II	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。「教育工学特論 I」での学習内容を基盤として、教育工学的見地から、ICT (Information and Communication Technology) を活用した授業をデザインし、評価・改善するための方法論についての理論や知見について学ぶことを目標とする。自己調整学習、社会的構成主義、正統的周辺参加等の話題についてテキストをベースとしつつ、関連資料を調査・分析した結果を基に議論したり、ICTを活用した授業をデザインすることを通して、理解を深める。</p>	
教育社会学特論 I	<p>前期課程1年春学期に開講されるグループディスカッションを取り入れた講義形式の授業である。「病いをもつ子ども」の社会学がテーマである。「病いをもつ子ども」の教育に関しては、病弱教育の制度や教育的支援のあり方等、多様な観点からの検討が可能である。しかし、本特論では「病い」による子どもの&lt;生&gt;や&lt;死&gt;をめぐる諸問題を、特に「語り」に焦点をあてて教育社会学的研究として扱うための理論の習得を主な目標とする。具体的な第1の目的は、人びとの「語り」に焦点をあてることの意義を理解することである。第2の目的は、本特論で扱う理論を精確に把握し、自らの研究に応用できるようにすることである。授業計画として、前半はA. W. フランクの理論を、後半はA. クラインマンの理論を検討する。いずれも病いの「語り」に焦点をあてた経験的研究の蓄積による理論形成を成している。</p>	
教育社会学特論 II	<p>前期課程1年秋学期に開講されるグループディスカッションを取り入れた講義形式の授業である。「教育社会学特論 I」に引き続き「病いをもつ子ども」をテーマとするが、本特論では「病いをもつ子ども」が学びの場として関わりをもつ「病院(という社会)」に焦点をあてる。学びの場としての病院の検討は、病院内教育のあり方を検討するにとどまらず、通常の「学校(という社会)」の検討も範疇に入る。したがって、本特論の主たる目標は、病院と学校という、一見異なる組織の共通点(および相違点)を探究し、支援の対象となる子どもの視点から社会全体の多様な学びのあり方を考えていくことである。授業計画としては、大半は精神病院のエスノグラフィー研究であるE. ゴフマンによる『アサイラム』の検討を行うが、その後は『アサイラム』と学校組織とを関連づける具体的論文を検討する。</p>	
教育行政学特論 I	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。教育政策の策定プロセスについて基本文献を通して理解を図り、次に政策分野ごとに現状と課題について検討することを目標とする。戦後教育政策の決定プロセス、地方分権改革と教育政策、初等中等教育政策、高等教育政策、教育行政政策等の話題について、文献講読及びディスカッションを通して、基本的に教育政策に関わるさまざまなファクターを総体的に把握・検討する作業を行う。</p>	
教育行政学特論 II	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。「教育行政学特論 I」の理解を継承しつつ、IIでは各政策分野に関する策定過程に関する検討を行うことを目標とする。戦後教育の基本法制、教育行財政政策(地方教育行政法、教育公務員特例法、国庫負担法、義務教育標準法)、教育内容法制(教科書、学習指導要領)、教育振興基本計画等の話題について、文献、議会の議事録などをつぶさに検討していく。最終的にわが国の教育政策の構想についてエビデンスに基づいた批判的な検討を行う。</p>	

教育評価特論 I	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。  「学習評価」の実際を理解し、教育実践を評価の視点から分析的に考察する力を養うことを目標とする。  まず前半でブルームの改訂版タクソノミーを手掛かりに、認知的能力の評価方法を学ぶ。次に、パフォーマンス評価におけるルーブリックの活用方法を理解した上で、前半で学んだ認知的能力の評価について、ICEルーブリックの考え方を学ぶ。最後に、形成的評価における標準的ルーブリックとICEルーブリックの働きを確認する。その上で、形成的評価と変容的評価の異同を踏まえて学習者主体の評価について学ぶ。一連の学習を通じ、学校現場における学習と評価の一体化における課題を理解し、その解決あるいは改善に向けた方策を調査・考察し、リサーチペーパーとしてまとめる。</p>	
教育評価特論 II	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。  プログラム／カリキュラム評価について理解することを目標とする。  「教育評価特論 I」では個々の授業における評価法とその効用について学んだが、IIでは個々の授業を有機的に繋ぎ、意図的・計画的に配列することで生じる教育効果について考える。特に、大学教育におけるカリキュラム編成の特徴と課題を理解し、学位授与方針に合うカリキュラム編成方針の策定、およびその成果検証の方法について調査・提案する。具体的には、大学が行う自己点検評価報告書を分析し、リサーチペーパーとして、適切なアセスメント方法を提案・開発する。</p>	
教育心理学特論 I	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。  教育心理学は、学校や家庭での教育的事象における問題を心理学的手法で解釈し、実際の教育実践に貢献することを目標にしている心理学の一分野である。子どもの成長・発達や人格形成、おもに学校での教育に関わる事象である学習・指導・評価・学級・適応・教師と児童の関係などについて学ぶことを目標とする。  具体的には、青年期・成人期・中年期・老年期における発達段階と課題、認知能力・社会情緒・道徳性など機能別の発達、またそれらに応じた学習理論や学習指導について考える。</p>	
教育心理学特論 II	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。  「教育心理学特論 I」に続き、発達心理学の領域の知識及び課題について習得することを目標とする。  具体的には、主に胎児期から乳幼児期にかけての発達、児童期における認知・言語能力の発達、家族関係や友人関係等を通じた社会性の発達、さらに学校生活における発達と学習の動機付け、自己の発達や子どもの適応と臨床等を題材に、時折、ディスカッションを行いながら考察する。</p>	
教科教育学特論 I (数学教育論)	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。  テーマは「難所を乗り越える授業研究」である。小学校算数の学習指導要領や教科書の内容を深く理解し、児童の理解度を考慮した上で算数の授業分析を行い、「難所」を克服する授業・教材開発が行えるようになることが目標である。  小学校算数の授業について、「A. 数と計算」「B. 量と測定」「C. 図形」「D. 数量関係」の領域ごとに、教材開発、指導案作成、模擬授業等とおした指導法の研究を行う。  特に小学校算数の指導内容における、いわゆる「難所」と呼ばれる単元に焦点を当て、どのような点が、なぜ児童にとって困難であるのか実例に基づいて追求するとともに、克服をめざした指導理論について学習する。</p>	
教科教育学特論 II (数学教育論)	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。  テーマは「身の回りの教材研究」である。小学校算数の学習指導要領や教科書の内容を深く理解し、従来の算数授業に足りない点を認識した上で、新しい授業の創出へと努力し、さまざまなアイデアを考え、実現させることができるようになることが目標である。  算数はもともと実用性の高い教科と言われており、身近なところから教材を見つけやすいが、ともするとありきたりな具体物を扱う指導にとどまり、数理的な目を養う効果を持ちにくい場合もある。この授業では算数の4領域にわたって、身の回りから様々な数理事象を見出し、そこから算数の教材を開発し、自分だけのオリジナルな授業を作り上げる力を養う。そのために模擬授業や討論を通してさまざまな教材をまとめ、実際の授業でも大いに役立つ教材研究とする。</p>	

<p>教科教育学特論Ⅰ（社会科教育論）</p>	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。文献をもとにディスカッションを行う形態を基本とし、フィールドワークや研究授業の参観なども取り入れていく。 社会科教育の存立意義を明らかにし、社会科教育における理論的基盤ならびに研究能力を身につけることを目標とする。 そのために本授業ではまず、日本の社会科がどのような経緯により、どのようなねらいによって成立したのかを明らかにする。その上で成立した社会科を体現した初期社会科の実践を検証する。また、日本の社会科成立の基盤となった戦前の郷土教育や生活綴り方、米国における社会科成立の背景なども取り上げていく。さらに戦後の社会科が昭和30年頃より変遷していく過程や背景について、当時の社会情勢の変化とともに社会科教育における論争―勝田・梅根論争などにも言及する。</p>	
<p>教科教育学特論Ⅱ（社会科教育論）</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。文献をもとにディスカッションを行う形態を基本とし、フィールドワークや研究授業の参観なども取り入れていく。 社会科教育の再構築を行い、社会科教育における理論的基盤ならびに研究能力を身につけることを目標とする。 そのために本授業では社会科が民主主義の担い手、すなわち社会の形成者の育成にあることを前提として、その理論的基盤とそれをもとにした実践に検討を加えることとする。授業ではジョン・デューイ(John Dewey)の「民主主義と教育」「経験と教育」などの文献をとりあげ、そこにおける社会科の成立基盤や社会科の本質について解明していく。その上で現代において、デューイ理論をもとに行われている実践、社会科教育の本質を体現していると考えられるシティズンシップ教育やサービス・ラーニングの実践について検討を加えることとする。</p>	
<p>日本教育思想史特論Ⅰ</p>	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。 牧口常三郎の著作を多角的に探求し、その視点から日本の教育思想史を考察する。特に牧口に関わる史料上の制約に取り組む中で、それに合った独自の方法論を開発しつつ、牧口の思想を明確にすることを目的とする。 Ⅰでは史料上の制約に焦点を当てる。牧口の思想とその形成過程を「内在的」に捉えることが困難をきたす要因として、牧口が残している文書に「私人」としての反省や思索を語るものが皆無に近いことが挙げられる。牧口の「沈黙」や「空白」をどう補充するか、という問題と対策を学生たちとともに考察する。</p>	
<p>日本教育思想史特論Ⅱ</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。 牧口常三郎の著作を多角的に探求し、その視点から日本の教育思想史を考察する。特に牧口に関わる史料上の制約に取り組む中で、それに合った独自の方法論を開発しつつ、牧口の思想を明確にすることを目的とする。 Ⅱでは、『創価教育学体系』などで引用される多くの翻訳書と、その引用によって出来上がっている特異の「言語空間」に焦点を当てる。周辺史料や確認された事実との往復作業、いわば解釈的循環によって、解釈する側の立ち位置や主観を自覚的に「内在的」な「理解 (Verstehen)」に接近する可能性を学生たちとともに探る。</p>	
<p>教育史資料特論Ⅰ</p>	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。 実証的な教育史研究を行う上で必要となる各種資料の調査、収集、整理、分析等の方法論について理解することを目標とする。 本授業では、特定の大学の歴史に関連するテーマを各受講生が設定し、そのテーマに関する一次資料（新聞記事、雑誌記事、証言記録、事務文書など）を調査・収集し、整理、分析する。その成果と、当該大学の歴史をめぐる従来の通説とを比較対照する。これらを通じて、一次資料を用いた教育史研究の意義と手法、可能性と限界を実践的に理解できるようにする。</p>	
<p>教育史資料特論Ⅱ</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。 実証的な教育史研究を行う上で必要となる各種資料の調査、収集、整理、分析等の方法論について理解することを目標とする。 本授業では、近現代日本の教育史に関する人物を対象としたオーラルヒストリー・インタビューを各受講生が実践する。研究資料として活用できる水準の成果物につながるインタビューを円滑に遂行すべく、事前調査、対象者との交渉、インタビュー準備、質問紙の設計、インタビューの実施、記録の作成、記録の分析などの各プロセスに即して具体的に指導する。これらを通じて、オーラルヒストリーを用いた教育史研究の意義と手法、可能性と限界を実践的に理解できるようにする。</p>	

<p>情報教育特論</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義・演習形式の授業である。 現代社会は、高度情報化社会から、知識基盤社会へと移行しつつある。学校ではICTの導入・活用が進んでおり、教育・学習の道具として、日常的に利用する機会が増えている。そのためこれからの教師には、より善くICTを活用できることや、そうした力を伸ばすための学習活動をデザインできることが、当然の資質として求められる。 こうした背景を踏まえ、この科目では知識基盤社会に必要な「生きる力」としての情報活用能力について実践的に学びつつ、教育・学習の在り方について考え、教師としての資質を高めることを目標とする。 具体的には多声的他者分析や自己アピールを用いたチラシ作りやプログラミング学習等を通し、情報活用能力を磨く。</p>	
<p>学校心理学特論</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。 現在、学校現場では、不登校・いじめ・発達障害など、様々な困難を抱えて学校生活を送っている児童・生徒がいる。そこで、本科目では、一人ひとりの児童・生徒を対象とした心理教育的援助サービスの理論と実践の体系である「学校心理学」について、講義、文献講読、演習を通して学習することを目標とする。 具体的には、現代の児童・生徒がもつ学校生活における様々な苦悩に対応した心理教育的援助サービス（心理教育的アセスメント、直接的援助サービスであるカウンセリング、間接的援助サービスであるコンサルテーション、チーム援助のシステム構築とコーディネーション）について、教育現場の実践事例を通して学びを深めていく。</p>	
<p>教育学演習Ⅲb</p>	<p>前期課程2年春学期に上記「教育学演習Ⅲa」と同一内容で合併開講されるゼミナール形式の授業である。 学生が指導教員以外の授業を履修するとき「教育学演習Ⅲb」と呼ぶ。 指導教員ではない教員から指導・助言を受けることで、修士論文の内容をより幅広くさせ、また議論をより深めることを目指している。各担当教員の専門領域及び研究テーマは以下のとおりである。 （1 牛田 伸一）：専門領域は教育方法学、研究テーマは教授学と教育課程、科学方法論 （2 鈴木 将史）：専門領域は数学教育学、研究テーマは算数・数学カリキュラムの歴史と国際比較 （3 関田 一彦）：専門領域は教育評価、研究テーマは学習理論、教育方法と評価の在り方 （4 富岡 比呂子）：専門領域は教育心理学、研究テーマは子どもの学習と自尊感情、創価教育論 （5 舟生 日出男）：専門領域は教育工学、研究テーマは学習支援と情報技術活用 （9 井上 伸良）：専門領域は教育行政学、研究テーマは教育政策と教育経営、教育法制 （10 鶴田 真紀）：専門領域は教育社会学、研究テーマは社会としての学校、子どもの社会学</p>	
<p>教育学演習Ⅳb</p>	<p>前期課程2年秋学期に上記「教育学演習Ⅳa」と同一内容で合併開講されるゼミナール形式の授業である。 指導教員ではない教員と討論し、指導・助言を受けることで、修士論文の内容をより幅広くさせ、また議論をより深めることを目指している。各担当教員の専門領域及び研究テーマは以下のとおりである。 （1 牛田 伸一）：専門領域は教育方法学、研究テーマは教授学と教育課程、科学方法論 （2 鈴木 将史）：専門領域は数学教育学、研究テーマは算数・数学カリキュラムの歴史と国際比較 （3 関田 一彦）：専門領域は教育評価、研究テーマは学習理論、教育方法と評価の在り方 （4 富岡 比呂子）：専門領域は教育心理学、研究テーマは子どもの学習と自尊感情、創価教育論 （5 舟生 日出男）：専門領域は教育工学、研究テーマは学習支援と情報技術活用 （9 井上 伸良）：専門領域は教育行政学、研究テーマは教育政策と教育経営、教育法制 （10 鶴田 真紀）：専門領域は教育社会学、研究テーマは社会としての学校、子どもの社会学</p>	

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目であって同時に授業を行う学生数が40人を超えることを想定するものについては、その旨及び当該想定する学生数を「備考」の欄に記入すること。
- 3 私立の大学若しくは高等専門学校の出発定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

授 業 科 目 の 概 要			
(教育学研究科教育学専攻臨床心理学専修博士前期課程)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修科目 基礎科目  演習（研究指導）	研究倫理	<p>本学大学院の全研究科で必修の計8回の講義からなる1単位科目である。研究競争の激化や情報量の飛躍的増大を背景として、近年剽窃や捏造、改竄といった研究不正が後を絶たない。そのような状況を踏まえ、大学院に入学して今後研究活動を行おうとしている学生が、何に注意して研究活動を行うべきかを理解し、正しい姿勢で研究活動に臨む態度を身につけることを目標とする。</p> <p>授業においては、公正研究推進協会が提供する「eAPRIN」の指定コースを受講させ、最新の映像教材等を活用しながらグループディスカッションを実施し、以下の授業担当者を中心に複数の兼任教員でファシリテーションを行う。</p> <p>(16 高橋 薫) (17 松森 秀幸) (18 三津村 正和)</p>	共同
	臨床心理学特論演習Ⅰ―1	<p>前期課程1年春学期に開講されるゼミナール形式の必修授業である。各学生が修士論文を作成する基礎となる能力を養うことを目標とする。そのために各担当教員の研究分野に応じて、臨床心理学分野のうち、学校臨床心理学、発達臨床心理学など自らの興味関心に関連する論文、学術書を精読し、自分の問題意識を明確にし、修士論文作成に向けて研究テーマを決める。</p> <p>各担当教員の研究分野は以下のとおりである。</p> <p>(6 遠藤 幸彦)：精神病理、精神分析 (7 園田 雅代)：臨床心理学とアサーション (8 高野 久美子)：学校臨床心理学、教育相談 (11 中野 良吾)：青年期のメンタルヘルス、スクールカウンセリング (12 毛利 眞紀)：青年期までの発達臨床</p>	
	臨床心理学特論演習Ⅱ―1	<p>前期課程1年秋学期に開講されるゼミナール形式の必修授業である。春学期に引き続き、各学生が修士論文を作成する基礎力をさらに磨くことを目標とする。</p> <p>春学期と同様に、各担当教員の専門分野を生かした指導のもと、関連する研究論文、学術書の精読を行う。関連研究図書・ジャーナルの精読を通して、資料収集の方法、調査方法、分析方法の検討など研究に必要なスキルを修得するとともに、自分の問題意識の明確化、研究方法の検討を行い修士論文作成に向けて予備的研究の具体的な研究計画の立案に取りかかる。</p> <p>各担当教員の研究分野は以下のとおりである。</p> <p>(6 遠藤 幸彦)：精神病理、精神分析 (7 園田 雅代)：臨床心理学とアサーション (8 高野 久美子)：学校臨床心理学、教育相談 (11 中野 良吾)：青年期のメンタルヘルス、スクールカウンセリング (12 毛利 眞紀)：青年期までの発達臨床</p>	
	臨床心理学特論演習Ⅰ―2	<p>前期課程2年春学期に開講されるゼミナール形式の必修授業である。各学生が修士論文の執筆に向けて、研究計画・実施状況について議論を行い、研究を具体化させることを目標とする。</p> <p>前期課程1年次で検討を重ねてきたテーマ・研究方法をより深め、修士論文作成に向けてゼミ生同士のディスカッションならびに個別の検討を主として進める。各担当教員は、専門分野（「臨床心理学特論演習Ⅰ―1」を参照）の知見に基づき適切な指導・助言を行う。</p> <p>各担当教員の研究分野は以下のとおりである。</p> <p>(6 遠藤 幸彦)：精神病理、精神分析 (7 園田 雅代)：臨床心理学とアサーション (8 高野 久美子)：学校臨床心理学、教育相談 (11 中野 良吾)：青年期のメンタルヘルス、スクールカウンセリング (12 毛利 眞紀)：青年期までの発達臨床</p>	

		臨床心理学特論演習Ⅱ-1	<p>前期課程2年秋学期に開講されるゼミナール形式の必修授業である。これまでの「臨床心理学特論演習」での取り組みを踏まえ、各学生が修士論文を作成することを目標とする。</p> <p>これまでに設定した研究計画に基づき、データの収集・処理・分析を進め修士論文を作成する。授業では随時、研究経過を報告し、各担当教員が専門分野（「臨床心理学特論演習Ⅱ-1」を参照）を生かした指導を行うとともに、学生相互でも討論による検討を行う。最終的な修士論文の作成は、基本的には個別指導で進める。</p> <p>各担当教員の研究分野は以下のとおりである。</p> <p>(6 遠藤 幸彦)：精神病理、精神分析  (7 園田 雅代)：臨床心理学とアサーション  (8 高野 久美子)：学校臨床心理学、教育相談  (11 中野 良吾)：青年期のメンタルヘルス、スクールカウンセリング  (12 毛利 真紀)：青年期までの発達臨床</p>	
選択科目	専門科目	臨床心理学特論Ⅰ	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。臨床心理学の基礎やその周辺領域である精神医学（精神症状学、診断学）について学ぶことを目標とする。</p> <p>精神機能と精神症状、精神障害分類（統合失調症、解離性障害、自閉症）等の話題について、毎回の担当を決めて各人が課題について発表し、その後全員で討論しながら理解を深めていく。また、担当以外の人は事前学習課題に取り組み、まとめを作成して授業に臨み、授業後の学習課題には全員が取り組む。</p>	
		臨床心理学特論Ⅱ	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。心理臨床の領域の一つである学生相談を取り上げて、その理論と実践を学ぶことを目標とする。</p> <p>学生相談というと「教員によるカウンセリング」や「カウンセリングマインド」といった印象をもちやすいが、単純な「学生相談＝カウンセリング」という図式ではなく、「教育上の諸問題を通じて、学生の人格の成長を図る」というのがその一義である。本講義では、日本の学生相談がどのような道のりを歩み現在に至るかを振り返った上で、今日的な話題として発達障害や虐待といった問題やスクールカウンセリングなどを含めた、現代的な学生相談のあり方とその実践について考察する。</p>	
		臨床心理面接特論Ⅰ（心理支援に関する理論と実践Ⅰ）	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。臨床心理面接についての基礎的理解を図り、かつ生産的な自己理解を深めることを目標とする。</p> <p>臨床心理面接の特質を探り、臨床心理を学ぶ者の要件のひとつである自己理解を進めていけるよう、文献研究ならびに体験学習（ロールプレイ・試行カウンセリングなど）を2本柱として展開する。春学期のⅠでは文献をもとにした相互ディスカッションを主とする。毎回のテキストを読み込み、考えを深めたり、自分がわかる点・わからない点の明確化などを図る。</p>	
		臨床心理面接特論Ⅱ（心理支援に関する理論と実践Ⅱ）	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。今後の面接陪席ならびにケース担当への準備に資するよう、「ケースをよく見て、自分でしっかり考え、必要なことを調べたり他者に相談したりできる基礎力」の育成を目標とする。</p> <p>Ⅱでは、前の学期の学習をより実践的に展開し、心理教育相談室のインターク・ケースの陪席ならびにケース担当に向けての準備を図る。具体的には、インターク面接場面の短時間ロールプレイ、それについての相互検討を主とする。</p>	
		臨床心理査定演習Ⅰ（心理的アセスメントに関する理論と実践Ⅰ）	<p>前期課程1年春学期に開講される演習形式の授業である。</p> <p>知能検査を行うことの意味を十分に理解した上で、WISC-IVを実施でき、子どもの発達状況を的確に捉えプロフィールを作成できるようになること、また保護者や関係諸機関への適切なフィードバックが行えるようになることを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(8 高野 久美子/8回)  心理査定を行うことについての意味と活用方法を概観したあと知能検査のWISC-IVについて理論と実施方法、解釈、心理援助における活用方法などを学ぶ。</p> <p>(11 中野 良吾/7回)  知能を「外界を全体として再構成するための認識能力」と定義した上で、普通教育に適する子どもとそうでない子どもを見分けるための検査として、知能を客観的に測定するために考案された田中ビネー式知能検査の理論と実際を学ぶ。</p>	オムニバス方式

<p>臨床心理査定演習Ⅱ（心理的アセスメントに関する理論と実践Ⅱ）</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講される演習形式の授業である。面接のプロセス、面接の特徴、経過、セラピスト、クライアントの特徴などを理解すること、またTATの基礎的理解を図り、特にその結果のフィードバックの基礎について把握できるようにすることを目標とする。 （オムニバス方式／全15回）</p> <p>（6 遠藤 幸彦／8回） 力動的心理療法における面接プロセス、PQSによる評価を学び、具体的な事例について議論をして理解を深める。面接のプロセスを理解することは、学派を問わず意味のあることである。そのための基礎トレーニングとすべく、各回のセッションについて、面接の特徴、経過、セラピスト、クライアントの特徴などを理解することを旨とする。</p> <p>（7 園田 雅代／7回） TATテストをもとに、クライアントの語りを理解し、結果をフィードバックして相互理解を深めていく方法を学ぶ。TATの基礎的理解を図り、特にその結果のフィードバックに関しての勘所、留意点などの基礎について把握できるようにする。</p>	<p>オムニバス方式</p>
<p>心理統計法特論</p>	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。心理学で使用される基本的な統計手法について基本的な考え方を学び、データの意味を読み取ることができるようになること、及び統計解析ソフトを用いたデータ解析ができるようになることを目標とする。 授業では、主に記述統計で 사용되는度数分布表やヒストグラム等の表現や、平均値、分散、相関係数等の変数・データの意味、用語、さらにt検定や分散分析等の解析手法について、統計解析ソフトを活用しながら学ぶ。</p>	
<p>心理学研究法特論</p>	<p>前期課程1年夏季休業期間中に開講される集中講義形式（週4日間・計15回）の授業である。 心理学の研究において用いられる研究方法について理解し、実践研究に活用するとともに多くの研究結果を吟味できるようになることを目標とする。 臨床心理学では、事例研究、過程研究、効果研究等によって諸理論のエビデンス（根拠）が探求されてきた。本講義では、これらの研究法を、代表的な研究例の吟味や模擬的データを用いた実習を通じて概観、解説する。そして、実践の学である臨床心理学において、研究という営為が果たす役割を検討する。</p>	
<p>認知心理学特論</p>	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。 認知行動療法の背景となる学問の内容及び認知行動療法の技法の有効性を理解し、認知行動療法の代表的な技法を修得するとともに、認知行動療法をセルフヘルプの技法として日常的に使えるようになることを目標とする。 認知行動療法は、認知（考え方・イメージ）や行動の不適切なパターンを修正し、気分・身体感覚の問題を解決するための精神療法（心理療法）であり、こころの病のみならず身体疾患に対してもその有効性が実証されている。 授業では、まず認知行動療法の背景となる基礎理論を学び、それを通して優れた心理臨床家は良い科学者であるとともに、熟練した臨床技芸の持ち主であるということを理解する。さらに後半では、疾病別の治療プロトコルや施行のコツなどを解説し、学生一人一人が自身に対する自己セラピストになれることを目指す。</p>	

<p>発達心理学特論</p>	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。発達臨床心理学の基本的な知識を身につけ、臨床現場での心理援助に活用できるようにすることを目標とする。</p> <p>近年、学校現場では発達障害のある児童生徒への支援が大きな課題となっており、心理援助職に期待が寄せられている。発達の視点を持つことは、どの臨床の現場においても支援を必要とする人たちに対して適切な援助をする際に不可欠である。授業では、臨床心理学と発達心理学の協働について、その理論と実際の基本を学ぶ。具体的には、人の生涯にわたる発達についての基本的な知識を身につけ、それを踏まえた上で、それぞれの発達段階で求められる援助について学習する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(8 高野 久美子・11中野 良吾/1回) (共同) 初回は、中野・高野が心理支援における発達心理学の果たす意味と役割について解説し、残り14回を7回ずつ担当する。</p> <p>(8 高野 久美子/7回) 胎児期から思春期までの発達の概要と各発達段階の課題について臨床心理学の側面から掘り下げる。また、各発達段階における行動上の問題や心理的危機を取り上げ、臨床心理的な介入方法について検討を行う。</p> <p>(11 中野 良吾/7回) 青年期から老年期までの発達の概要と各発達段階の課題について臨床心理学の側面から掘り下げる。加えて死をめぐる諸問題についても扱う。また、各発達段階における行動上の問題や心理的危機を取り上げ、臨床心理的な介入方法について検討を行う。</p>	<p>オムニバス方式・共同 (一部)</p>
<p>家族心理学特論 (家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践)</p>	<p>前期課程夏季休業期間中に隔年で開講される集中講義形式 (週4日間・計15回) の授業である。</p> <p>多くの臨床実践の現場では、虐待、離婚、再婚、介護などをめぐって、個人だけではなく家族の問題も扱わざるを得ないことが多い。そのため家族心理学では、個人の心理的病理を家族関係との関連で捉えることを目標とする。この授業では、家族を捉える上での鍵概念をシステム論の観点から伝えるとともに、リクルートメント、ジョイニング、リフレーミング、ロールプレイなどの実習を通して、家族への理解を深める。</p>	<p>隔年</p>
<p>犯罪心理学特論 (司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開)</p>	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。</p> <p>非行・犯罪心理学の基礎的知識の習得と非行臨床の技法について学習することを目標とする。</p> <p>授業では、素行障害と反社会性人格障害、被虐待経験と少年非行などの基礎理論を扱ったのち、非行臨床における面接技法の習得、特に家族療法におけるシステムズアプローチの有効性について、事例研究を通して検討する。後半では非行臨床に関する基礎的な文献研究を通して批判的な検討を行う。</p>	
<p>精神医学特論 (保健医療分野に関する理論と支援の展開)</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。</p> <p>精神科臨床の具体的な側面を学びながら、それぞれの項目が意味するところを理解し説明できること、またそれらについての課題や批判点も理解した上で、それらを統合的に把握することで、事例に対するアプローチについて、自分なりの組み立てを可能とすることを目標とする。</p> <p>授業では精神科臨床における治療学の概要について、ノーマライゼーション、合理的配慮、ひきこもり、不登校、摂食障害など各テーマごとに学ぶ。また、司法精神医学など、いくつかの領域について概観する。</p>	
<p>障害児心理学特論 (福祉分野に関する理論と支援の展開)</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。</p> <p>障害といってもその種類は多様である。本授業では、障害全般を概観した上で、知的障害、自閉症スペクトラム障害、注意欠如・多動性障害、学習障害、発達性協調運動障害などの発達障害に焦点をあてて、理解を深めるとともに、発達障害のアセスメント、療育法、親支援について習得することを目標とする。</p> <p>具体的には、発達障害の基礎知識を確認してから、発達障害のアセスメント、療育、親支援について現在の国内外の状況を把握していく。</p>	
<p>投影法特論 I</p>	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。</p> <p>心理臨床現場でもっとも活用されている心理検査の一つであるロールシャッハテストについて、成り立ちと性質を正しく理解するとともに、一人一人がテストを試行し、まとめ、解釈できるようになることを目標とする。</p> <p>本授業では、ロールシャッハテストの歴史から、施行法、コーディングと集計、そして構造一覧表の作成まで行う。ロールプレイや演習を取り入れながら、学生各人が実際にロールシャッハテストを施行できるようになるよう訓練する。</p>	

<p>投影法特論Ⅱ</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。 春学期に引き続きロールシャッハテストについての学習を進め、各自がロールシャッハテストを解釈し、総合所見を書くことが出来るようになること、またいくつかの精神障害の臨床ケースを実際に解釈できるようになることを目標とする。 Ⅱではロールシャッハテストの解釈ステップについて学ぶ。そして総合所見の書き方を学び、その後実際にいくつかの臨床ケースの解釈を行う。</p>	
<p>病院臨床心理学特論</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。 精神医学的現象学（精神病理学的現象学）の把握と精神医学的疾患に関する概要の修得を目標とする。 具体的には、精神病理学的現象学に関する精神医学の教科書における記述を概観し、ユング心理学との関係を探るとともに、不安障害、気分障害、統合失調症、アスペルガー等の発達障害等の精神医学的疾患について、全体像を把握するとともに、心理学的見地から捉え考察を加える。</p>	
<p>精神分析特論</p>	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。 精神分析の基本的な理解は、メンタルヘルスに関わる領域の専門職としての基礎的素養である。本授業では、精神分析の基本的な概念を理解した上で、トレーニングの要素を持たせて、より臨床的な実感をするを目標とする。 具体的には、精神分析の基本的な理論や概念について、歴史的必然性やその変遷を理解するとともに、転移や抵抗などの臨床的な概念や治療技法について、理論的背景から具体的な症例までを連続的に理解し、臨床に役立つ実際的な理解を深める。また、精神分析理論と臨床とを照らし合わせ、症例理解から日常心理の理解まで、応用可能な知識を獲得することにより、後期課程以降の発展的、臨床的学習の基盤を形成する。</p>	
<p>学校臨床心理学特論（教育分野に関する理論と支援の展開）</p>	<p>前期課程1年春学期に開講される講義形式の授業である。 子どもの問題に対処するには、心理治療や家族関係の調整だけでなく、学校側の子どもに対する理解や支援、協力態勢を確立していくことが重要である。本授業では、「学校システム」への理解を深め、学校教育における今日の課題を整理するとともに、教師へのコンサルテーションについて理解することを目標とする。 具体的には、いじめや不登校、引きこもりや特別支援教育、さらには教師のメンタルヘルスなど日本の学校教育の現状と課題を一つ一つ扱い、考察を深める。</p>	
<p>心の健康教育に関する理論と実践</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。 「心の健康教育」に関しての主な理論を学ぶこと、代表的な心の健康教育について実践的に検討することを目標とする。 今後、メンタルヘルスへの関心はますます高まっていくと思われる。しかも「罹患していない状態」としての「健康」ではなく、「身体的・精神的・社会的に良好な状態」という大きな概念に強い関心を払っていくようになるであろう。この授業では、保健医療、福祉、教育、司法・犯罪、産業・労働といったあらゆる分野での心の健康について、理論的・実践的に考察する。</p>	
<p>産業・労働分野に関する理論と支援の展開</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講される講義形式の授業である。 産業・労働分野における心理臨床の活動の概要を把握し、メンタルヘルス教育などの予防的介入から復職支援まで、幅広い業務に関する基本的な知識とスキルを修得することを目標とする。 産業心理臨床の特質について学び、現代の産業社会の中でそれが果たす役割と意義、およびそれを実践するための諸活動について概括的に学び、理解を深める。授業の前半で、産業心理臨床を支える理論や実践の背景にある法律、産業・労働分野における心理臨床の現状について学ぶ。その上で、うつ病と自殺の予防、心理教育、職場のハラスメント、就職支援、復職支援、多機関連携などについて、実践例を題材に具体的支援について掘り下げる。</p>	

<p>実習科目</p>	<p>臨床心理基礎実習 I</p>	<p>前期課程1年春学期に開講される実習形式の授業である。カウンセリングの基礎的な理論、技法を習得し、実践に活用することができることを目標とする。 前半はカウンセリングの理論として、「クライアント（来談者）中心療法」を学び、さらに「マイクロカウンセリングの技法」を習得する。後半は、学習したことを実践するため、「ロールプレイ」を行う。ロールプレイはグループに分かれ、カウンセラー役、クライアント役、観察者を決めて実習する。なお、心理教育相談室カンファランス（事例検討）にも出席し、実際の支援事例の検討を通して実践について理解を深める。 (オムニバス方式/全30回)</p> <p>(12 毛利 真紀/15回) 前半で来談者中心療法について詳しく説明された「カウンセリングを学ぶ」というテキストの輪読とディスカッションを通してカウンセリングの基本的理論を学ぶ。</p> <p>(11 中野 良吾/15回) 前半15回で学んだカウンセリングの基本的理論を踏まえて、実践的な技法を扱っている「マイクロカウンセリング技法」というテキストの輪読とディスカッションを行い、その後、大学付属の心理教育相談室においてロールプレイによるカウンセリングの基本的な実習を行う。</p>	<p>オムニバス方式</p>
	<p>臨床心理基礎実習 II</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講される実習形式の授業である。体験的ワーク、実習を通して自己理解を深め、自身の特性や価値観を踏まえた心理援助を考えることができることを目標とする。 本授業は臨床心理士試験受験資格に必要な科目として設定されており、心理教育相談室の受付、電話対応の実習を行い、心理援助職に必要なセルフアウェアネスをワークを通して体験的に学ぶとともに、心理教育相談室事例検討（カンファランス）に参加する。 以下の2名の授業担当者が学生を半数ずつのグループに分けて指導を行う。 (8 高野 久美子) (12 毛利 真紀)</p>	<p>共同</p>
	<p>心理実践実習 I</p>	<p>前期課程1年秋学期に開講される実習形式の授業である。実習を通して学校臨床の実際を体験し、福祉施設、学校現場における心理援助のあり方を学ぶことを目標とする。 公認心理師に必要な科目として、以下の見学実習を行う。 ・福祉分野・教育分野：見学実習（4か所）事前・事後学習を含め1か所につき6時間 計24時間 また、見学実習を通して、福祉施設における心理職の役割、学校への側面援助を行う専門職の機能、意義を理解し、多様な心理援助のあり方を実地に学ぶ。 以下の2名の授業担当者が実習先を分担して引率指導を行う。 (6 遠藤 幸彦) (8 高野 久美子)</p>	<p>共同</p>
	<p>臨床心理実習 I（心理実践実習 II）</p>	<p>前期課程2年春学期に開講される実習形式の授業である。実習を通して、確かな知識の習得がなされ、かつ総合的な検討力が向上すること、またこの分野で今後仕事をしていくことについての生産的な自己検討が行われることを目標とする。 実習としては、以下の2つを行う。 ①学外実習、及びそのカンファランスへの参加など 学外実習は、下記2分野の実習を臨床心理実習 II（心理実践実習 III）と組み合わせ、一人の学生が2年次において両分野の実習を行う。 ・保健医療分野：継続実習 週1回 5～8時間 ・教育分野：継続実習 週1回 5～8時間 ②学内の心理教育相談室でのケース陪席、ケース担当、スーパービジョン、またケースカンファランスへの参加・発表など ・ケース陪席 院生一人当たり平均5 ケースを担当 ・ケース担当 院生一人当たり平均4 ケースを担当 ・スーパービジョン 各回ごとに教員のスーパービジョンを個別に受ける。 ・ケースカンファランス 以下の4名の授業担当者が①では実習先を分担して引率指導を行い、②では各教員の指導学生に対して指導を行う。 (6 遠藤 幸彦) (7 園田 雅代) (8 高野 久美子) (11 中野 良吾)</p>	<p>共同</p>

臨床心理実習Ⅱ（心理実践実習Ⅲ）	<p>前期課程2年秋学期に開講される実習形式の授業である。前学期に引き続き実習を通して、確かな知識の習得がなされ、かつ総合的な検討力が向上すること、またこの分野で今後仕事をしていくことについての生産的な自己検討が行われることを目標とする。実習としては、以下の2つを行う。なお5名の授業担当者で実習先を分担する。</p> <p>①学外における実習、そのカンファレンスへの参加など 学外実習は、臨床心理実習Ⅰ（心理実践実習Ⅱ）で割り当てられなかった分野の実習を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保健医療分野：継続実習 週1回 5～8時間</li> <li>・教育分野：継続実習 週1回 5～8時間</li> </ul> <p>②学内の心理教育相談室でのケース陪席、ケース担当、スーパービジョンを受けること、またケースカンファレンスへの参加・発表など</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ケース陪席 院生一人当たり平均5ケースを担当</li> <li>・ケース担当 院生一人当たり平均4ケースを担当</li> <li>・スーパービジョン 各回ごとに教員のスーパービジョンを個別に受ける。</li> <li>・ケースカンファレンス</li> </ul> <p>以下の4名の授業担当者が①では実習先を分担して引率指導を行い、②では各教員の指導学生に対して指導を行う。</p> <p>(6 遠藤 幸彦) (7 園田 雅代) (8 高野 久美子) (11 中野 良吾)</p>	共同
心理面接実践実習Ⅰ	<p>前期課程2年春学期に開講される実習形式の授業である。学生が担当するケースの検討を通して事例の理解を深めると同時に、自己省察を促し心理臨床家としての基礎を身につけることを目標とする。本学心理教育相談室において、博士前期課程2年生が学外からの相談を担当し、実践的な実習を行っている。来談者の了承を得た上で、毎回のセッションを録音あるいは録画し、その逐語記録をもとに、スーパーバイザーである教員（事例ごとの担当制）と事例について検討を行う。内容は、カウンセリング、プレイセラピーでの応答や対応についての検討、来談者についてのアセスメント、院生自身の自己省察等についてである。授業では、各自が担当する事例の毎回のセッションの逐語記録と内容についての考察を用意し、スーパーバイザーの教員と個別に検討を行う。事例担当者のみが出席する。</p> <p>以下の5名の授業担当者が、各教員の指導学生に対して指導を行う。</p> <p>(6 遠藤 幸彦) (7 園田 雅代) (8 高野 久美子) (11 中野 良吾) (12 毛利 眞紀)</p>	共同
心理面接実践実習Ⅱ	<p>前期課程2年秋学期に開講される実習形式の授業である。春学期に引き続き、学生が担当するケースの検討を通して事例の理解を深めると同時に、自己省察を促し心理臨床家としての基礎を身につけることを目標とする。</p> <p>具体的には、「心理面接実践実習Ⅰ」と同様の内容を、より掘り下げて行う。加えて、大学院修了時期に合わせて、相談の終結あるいは後任への引継ぎについての検討を行う。</p> <p>各自が担当する事例の毎回のセッションの逐語記録と内容についての考察を用意し、スーパーバイザーの教員と個別に検討を行う。事例担当者のみが出席する。</p> <p>以下の5名の授業担当者が、各教員の指導学生に対して指導を行う。</p> <p>(6 遠藤 幸彦) (7 園田 雅代) (8 高野 久美子) (11 中野 良吾) (12 毛利 眞紀)</p>	共同

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目であって同時に授業を行う学生数が40人を超えることを想定するものについては、その旨及び当該想定する学生数を「備考」の欄に記入すること。
- 3 私立の大学若しくは高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

授 業 科 目 の 概 要			
(教育学研究科教育学専攻博士後期課程)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
必修科目	研究科共通科目	<p>後期課程1年春学期に開講される講義形式の必修授業である。以下の5項目にわたる知識・考察力・主体性・協働性を獲得することを目標とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 自立した先端的研究者となるための心構え</li> <li>2. 学生の相互啓発による現代的諸課題解決のための幅広い視野</li> <li>3. 先端的研究者による実践例</li> <li>4. 自らの研究計画の作成能力</li> <li>5. 論文の具体的書き方の修得（オムニバス方式／全15回）</li> </ol> <p>(1 牛田 伸一／8回) 具体的な研究者の事例をもとに、研究結実までのプロセスを具体的に追跡することで、受講者が研究の進め方を構想する端緒とする。 続いて受講者の研究における問題関心と現在の教育学研究において問題化しているテーマとのすり合わせを図る。</p> <p>(8 舟生 日出男／7回) 学位論文全体の研究計画を具体的に構想する。その上で、その中から1つの章を選び、論文の作成に取り組む。その成果を、研究会などで発表すると共に、査読付き論文の草稿として仕上げる。</p>	オムニバス方式
選択必修科目	研究指導科目	<p>後期課程1年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。前期課程を修了して修士論文を書き上げた後期課程1年生が、本格的に研究者を目指し、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、教育学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文へとつながる研究を探索しつつ、様々な論文を読んで批判的に検討するとともに、自ら新しい問題を作り出して研究の見通しを立てる習慣をつけるための演習を行う。</p>	
	教育学特殊研究指導Ⅰ	<p>後期課程1年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。前の学期に引き続き、博士論文につながる研究題材の発見を視野に入れ、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、教育学を専門とする指導教員の指導のもと、さらに様々な論文を幅広く読んで批判的に検討するとともに、新しい問題を作り出し、自らの見通しに従って研究を進め、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
	教育学特殊研究指導Ⅱ	<p>後期課程2年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。1年次に引き続き、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を進めながら、博士論文につながる研究題材を次第に絞っていくことを目標とする。</p> <p>具体的には、教育学を専門とする指導教員の指導のもと、研究分野のある程度絞り、関連する研究論文を深く掘り下げて読みつつ、先行研究に残された研究課題を見出す。その上で見出した研究課題においてより深い問題を作り出し、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
	教育学特殊研究指導Ⅲ	<p>後期課程2年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。前の学期に引き続き、博士論文で取り組む研究分野や研究課題を絞り、本格的に学位論文作成へとスタート準備を整えることを目標とする。</p> <p>具体的には、教育学を専門とする指導教員の指導のもと、最終的に博士論文で取り組む独自の研究課題を決定する。関連する研究論文を参考にしつつ、博士論文につながる視点を定めるとともに、研究の見通しを立てて独自の結論を見出すことを目指す。博士論文にとどまらず、新しい研究を査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
	教育学特殊研究指導Ⅳ	<p>後期課程3年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。2年次までの研究の進展を受け、研究課題の妥当性を吟味しながら博士論文を作成することを目標とする。</p> <p>具体的には、教育学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文の執筆を進めるとともに、研究成果については積極的に研究集会で発表し、他の専門家の意見を仰ぐようにする。そのような活動を通して博士論文の質が一定水準以上になるように上げていくことを目指す。</p>	
教育学特殊研究指導Ⅴ			

教育工学特殊研究指導Ⅵ	<p>後期課程3年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。これまでの研究成果を盛り込んだ博士論文を完成させ、審査に合格することを目標とする。</p> <p>教育方法を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文を完成させる。ゼミで発表するだけでなく、研究会やシンポジウムなどでも広く発表を行い、研究成果をチェックする機会を得るとともに、他の研究者の意見をうかがうことで、今後新たな研究を開拓するためのヒントを得る機会とする。</p>	
教育方法学特殊研究指導Ⅰ	<p>後期課程1年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。前期課程を修了して修士論文を書き上げた後期課程1年生が、本格的に研究者を目指し、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、教育方法を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文へとつながる研究を模索しつつ、様々な論文を読んで批判的に検討するとともに、自ら新しい問題を作り出して研究の見通しを立てる習慣をつけるための演習を行う。</p>	
教育方法学特殊研究指導Ⅱ	<p>後期課程1年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。前の学期に引き続き、博士論文につながる研究題材の発見を視野に入れ、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、教育方法を専門とする指導教員の指導のもと、さらに様々な論文を幅広く読んで批判的に検討するとともに、新しい問題を作り出し、自らの見通しに従って研究を進め、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
教育方法学特殊研究指導Ⅲ	<p>後期課程2年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。1年次に引き続き、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を進めながら、博士論文につながる研究題材を次第に絞っていくことを目標とする。</p> <p>具体的には、教育方法を専門とする指導教員の指導のもと、研究分野をある程度絞り、関連する研究論文を深く掘り下げて読みつつ、先行研究に残された研究課題を見出す。その上で見出した研究課題においてより深い問題を作り出し、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
教育方法学特殊研究指導Ⅳ	<p>後期課程2年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。前の学期に引き続き、博士論文で取り組む研究分野や研究課題を絞り、本格的に学位論文作成へとスタート準備を整えることを目標とする。</p> <p>具体的には、教育方法を専門とする指導教員の指導のもと、最終的に博士論文で取り組む独自の研究課題を決定する。関連する研究論文を参考にしつつ、博士論文につながる視点を定めるとともに、研究の見通しを立てて独自の結論を見出すことを目指す。博士論文にとどまらず、新しい研究を査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
教育方法学特殊研究指導Ⅴ	<p>後期課程3年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。2年次までの研究の進展を受け、研究課題の妥当性を吟味しながら博士論文を作成することを目標とする。</p> <p>具体的には、教育方法を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文の執筆を進めるとともに、研究成果については積極的に研究会で発表し、他の専門家の意見を仰ぐようにする。そのような活動を通して博士論文の質が一定水準以上になるように上げていくことを目指す。</p>	
教育方法学特殊研究指導Ⅵ	<p>後期課程3年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。これまでの研究成果を盛り込んだ博士論文を完成させ、審査に合格することを目標とする。</p> <p>教育方法を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文を完成させる。ゼミで発表するだけでなく、研究会やシンポジウムなどでも広く発表を行い、研究成果をチェックする機会を得るとともに、他の研究者の意見をうかがうことで、今後新たな研究を開拓するためのヒントを得る機会とする。</p>	
教育心理学特殊研究指導Ⅰ	<p>後期課程1年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。前期課程を修了して修士論文を書き上げた後期課程1年生が、本格的に研究者を目指し、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、教育心理学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文へとつながる研究を模索しつつ、様々な論文を読んで批判的に検討するとともに、自ら新しい問題を作り出して研究の見通しを立てる習慣をつけるための演習を行う。</p>	

教育心理学特殊研究指導Ⅱ	<p>後期課程1年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。前の学期に引き続き、博士論文につながる研究題材の発見を視野に入れ、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、教育心理学を専門とする指導教員の指導のもと、さらに様々な論文を幅広く読んで批判的に検討するとともに、新しい問題を作り出し、自らの見通しに従って研究を進め、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
教育心理学特殊研究指導Ⅲ	<p>後期課程2年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。1年次に引き続き、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を進めながら、博士論文につながる研究題材を次第に絞っていくことを目標とする。</p> <p>具体的には、教育心理学を専門とする指導教員の指導のもと、研究分野をある程度絞り、関連する研究論文を深く掘り下げて読みつつ、先行研究に残された研究課題を見出す。その上で見出した研究課題においてより深い問題を作り出し、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
教育心理学特殊研究指導Ⅳ	<p>後期課程2年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。前の学期に引き続き、博士論文で取り組む研究分野や研究課題を絞り、本格的に学位論文作成へとスタート準備を整えることを目標とする。</p> <p>具体的には、教育心理学を専門とする指導教員の指導のもと、最終的に博士論文で取り組む独自の研究課題を決定する。関連する研究論文を参考にしつつ、博士論文につながる視点を定めるとともに、研究の見通しを立てて独自の結論を見出すことを目指す。博士論文にとどまらず、新しい研究を査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
教育心理学特殊研究指導Ⅴ	<p>後期課程3年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。2年次までの研究の進展を受け、研究課題の妥当性を吟味しながら博士論文を作成することを目標とする。</p> <p>具体的には、教育心理学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文の執筆を進めるとともに、研究成果については積極的に研究集会で発表し、他の専門家の意見を仰ぐようにする。そのような活動を通して博士論文の質が一定水準以上になるように上げていくことを目指す。</p>	
教育心理学特殊研究指導Ⅵ	<p>後期課程3年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。これまでの研究成果を盛り込んだ博士論文を完成させ、審査に合格することを目標とする。</p> <p>教育心理学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文を完成させる。ゼミで発表するだけでなく、研究集会やシンポジウムなどでも広く発表を行い、研究成果をチェックする機会を得るとともに、他の研究者の意見をうかがうことで、今後新たな研究を開拓するためのヒントを得る機会とする。</p>	
臨床心理学特殊研究指導Ⅰ	<p>後期課程1年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。前期課程を修了して修士論文を書き上げた後期課程1年生が、本格的に研究者を目指し、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、臨床心理学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文へとつながる研究を模索しつつ、様々な論文を読んで批判的に検討するとともに、自ら新しい問題を作り出して研究の見通しを立てる習慣をつけるための演習を行う。</p>	
臨床心理学特殊研究指導Ⅱ	<p>後期課程1年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。前の学期に引き続き、博士論文につながる研究題材の発見を視野に入れ、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、臨床心理学を専門とする指導教員の指導のもと、さらに様々な論文を幅広く読んで批判的に検討するとともに、新しい問題を作り出し、自らの見通しに従って研究を進め、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
臨床心理学特殊研究指導Ⅲ	<p>後期課程2年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。1年次に引き続き、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を進めながら、博士論文につながる研究題材を次第に絞っていくことを目標とする。</p> <p>具体的には、臨床心理学を専門とする指導教員の指導のもと、研究分野をある程度絞り、関連する研究論文を深く掘り下げて読みつつ、先行研究に残された研究課題を見出す。その上で見出した研究課題においてより深い問題を作り出し、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	

臨床心理学特殊研究指導Ⅳ	<p>後期課程2年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>前の学期に引き続き、博士論文で取り組む研究分野や研究課題を絞り、本格的に学位論文作成へとスタート準備を整えることを目標とする。</p> <p>具体的には、臨床心理学を専門とする指導教員の指導のもと、最終的に博士論文で取り組む独自の研究課題を決定する。関連する研究論文を参考にしつつ、博士論文につながる視点を定めるとともに、研究の見通しを立てて独自の結論を見出すことを目指す。博士論文にとどまらず、新しい研究を査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
臨床心理学特殊研究指導Ⅴ	<p>後期課程3年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>2年次までの研究の進展を受け、研究課題の妥当性を吟味しながら博士論文を作成することを目標とする。</p> <p>具体的には、臨床心理学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文の執筆を進めるとともに、研究成果については積極的に研究集会で発表し、他の専門家の意見を仰ぐようにする。そのような活動を通して博士論文の質が一定水準以上になるように上げていくことを目指す。</p>	
臨床心理学特殊研究指導Ⅵ	<p>後期課程3年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>これまでの研究成果を盛り込んだ博士論文を完成させ、審査に合格することを目標とする。</p> <p>臨床心理学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文を完成させる。ゼミで発表するだけでなく、研究集会やシンポジウムなどでも広く発表を行い、研究成果をチェックする機会を得るとともに、他の研究者の意見をうかがうことで、今後新たな研究を開拓するためのヒントを得る機会とする。</p>	
教科教育学特殊研究指導Ⅰ	<p>後期課程1年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>前期課程を修了して修士論文を書き上げた後期課程1年生が、本格的に研究者を目指し、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、教科教育学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文へとつながる研究を模索しつつ、様々な論文を読んで批判的に検討するとともに、自ら新しい問題を作り出して研究の見通しを立てる習慣をつけるための演習を行う。</p>	
教科教育学特殊研究指導Ⅱ	<p>後期課程1年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>前の学期に引き続き、博士論文につながる研究題材の発見を視野に入れ、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、教科教育学を専門とする指導教員の指導のもと、さらに様々な論文を幅広く読んで批判的に検討するとともに、新しい問題を作り出し、自らの見通しに従って研究を進め、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
教科教育学特殊研究指導Ⅲ	<p>後期課程2年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>1年次に引き続き、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を進めながら、博士論文につながる研究題材を次第に絞っていくことを目標とする。</p> <p>具体的には、教科教育学を専門とする指導教員の指導のもと、研究分野をある程度絞り、関連する研究論文を深く掘り下げて読みつつ、先行研究に残された研究課題を見出す。その上で見出した研究課題においてより深い問題を作り出し、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
教科教育学特殊研究指導Ⅳ	<p>後期課程2年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>前の学期に引き続き、博士論文で取り組む研究分野や研究課題を絞り、本格的に学位論文作成へとスタート準備を整えることを目標とする。</p> <p>具体的には、教科教育学を専門とする指導教員の指導のもと、最終的に博士論文で取り組む独自の研究課題を決定する。関連する研究論文を参考にしつつ、博士論文につながる視点を定めるとともに、研究の見通しを立てて独自の結論を見出すことを目指す。博士論文にとどまらず、新しい研究を査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
教科教育学特殊研究指導Ⅴ	<p>後期課程3年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>2年次までの研究の進展を受け、研究課題の妥当性を吟味しながら博士論文を作成することを目標とする。</p> <p>具体的には、教科教育学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文の執筆を進めるとともに、研究成果については積極的に研究集会で発表し、他の専門家の意見を仰ぐようにする。そのような活動を通して博士論文の質が一定水準以上になるように上げていくことを目指す。</p>	

教科教育学特殊研究指導Ⅵ	<p>後期課程3年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。これまでの研究成果を盛り込んだ博士論文を完成させ、審査に合格することを目標とする。</p> <p>教科教育学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文を完成させる。ゼミで発表するだけでなく、研究会やシンポジウムなどでも広く発表を行い、研究成果をチェックする機会を得るとともに、他の研究者の意見をうかがうことで、今後新たな研究を開拓するためのヒントを得る機会とする。</p>	
学習教授法特殊研究指導Ⅰ	<p>後期課程1年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。前期課程を修了して修士論文を書き上げた後期課程1年生が、本格的に研究者を目指し、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、学習教授法を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文へとつながる研究を模索しつつ、様々な論文を読んで批判的に検討するとともに、自ら新しい問題を作り出して研究の見通しを立てる習慣をつけるための演習を行う。</p>	
学習教授法特殊研究指導Ⅱ	<p>後期課程1年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。前の学期に引き続き、博士論文につながる研究題材の発見を視野に入れ、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、学習教授法を専門とする指導教員の指導のもと、さらに様々な論文を幅広く読んで批判的に検討するとともに、新しい問題を作り出し、自らの見通しに従って研究を進め、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
学習教授法特殊研究指導Ⅲ	<p>後期課程2年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。1年次に引き続き、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を進めながら、博士論文につながる研究題材を次第に絞っていくことを目標とする。</p> <p>具体的には、学習教授法を専門とする指導教員の指導のもと、研究分野をある程度絞り、関連する研究論文を深く掘り下げて読みつつ、先行研究に残された研究課題を見出す。その上で見出した研究課題においてより深い問題を作り出し、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
学習教授法特殊研究指導Ⅳ	<p>後期課程2年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。前の学期に引き続き、博士論文で取り組む研究分野や研究課題を絞り、本格的に学位論文作成へとスタート準備を整えることを目標とする。</p> <p>具体的には、学習教授法を専門とする指導教員の指導のもと、最終的に博士論文で取り組む独自の研究課題を決定する。関連する研究論文を参考にしつつ、博士論文につながる視点を定めるとともに、研究の見通しを立てて独自の結論を見出すことを目指す。博士論文にとどまらず、新しい研究を査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
学習教授法特殊研究指導Ⅴ	<p>後期課程3年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。2年次までの研究の進展を受け、研究課題の妥当性を吟味しながら博士論文を作成することを目標とする。</p> <p>具体的には、学習教授法を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文の執筆を進めるとともに、研究成果については積極的に研究会で発表し、他の専門家の意見を仰ぐようにする。そのような活動を通して博士論文の質が一定水準以上になるように上げていくことを目指す。</p>	
学習教授法特殊研究指導Ⅵ	<p>後期課程3年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。これまでの研究成果を盛り込んだ博士論文を完成させ、審査に合格することを目標とする。</p> <p>学習教授法を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文を完成させる。ゼミで発表するだけでなく、研究会やシンポジウムなどでも広く発表を行い、研究成果をチェックする機会を得るとともに、他の研究者の意見をうかがうことで、今後新たな研究を開拓するためのヒントを得る機会とする。</p>	
学校心理学特殊研究指導Ⅰ	<p>後期課程1年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。前期課程を修了して修士論文を書き上げた後期課程1年生が、本格的に研究者を目指し、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、学校心理学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文へとつながる研究を模索しつつ、様々な論文を読んで批判的に検討するとともに、自ら新しい問題を作り出して研究の見通しを立てる習慣をつけるための演習を行う。</p>	

学校心理学特殊研究指導Ⅱ	<p>後期課程1年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>前の学期に引き続き、博士論文につながる研究題材の発見を視野に入れ、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、学校心理学を専門とする指導教員の指導のもと、さらに様々な論文を幅広く読んで批判的に検討するとともに、新しい問題を作り出し、自らの見通しに従って研究を進め、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
学校心理学特殊研究指導Ⅲ	<p>後期課程2年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>1年次に引き続き、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を進めながら、博士論文につながる研究題材を次第に絞っていくことを目標とする。</p> <p>具体的には、学校心理学を専門とする指導教員の指導のもと、研究分野をある程度絞り、関連する研究論文を深く掘り下げて読みつつ、先行研究に残された研究課題を見出す。その上で見出した研究課題においてより深い問題を作り出し、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
学校心理学特殊研究指導Ⅳ	<p>後期課程2年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>前の学期に引き続き、博士論文で取り組む研究分野や研究課題を絞り、本格的に学位論文作成へとスタート準備を整えることを目標とする。</p> <p>具体的には、学校心理学を専門とする指導教員の指導のもと、最終的に博士論文で取り組む独自の研究課題を決定する。関連する研究論文を参考にしつつ、博士論文につながる視点を定めるとともに、研究の見通しを立てて独自の結論を見出すことを目指す。博士論文にとどまらず、新しい研究を査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
学校心理学特殊研究指導Ⅴ	<p>後期課程3年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>2年次までの研究の進展を受け、研究課題の妥当性を吟味しながら博士論文を作成することを目標とする。</p> <p>具体的には、学校心理学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文の執筆を進めるとともに、研究成果については積極的に研究集会で発表し、他の専門家の意見を仰ぐようにする。そのような活動を通して博士論文の質が一定水準以上になるように上げていくことを目指す。</p>	
学校心理学特殊研究指導Ⅵ	<p>後期課程3年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>これまでの研究成果を盛り込んだ博士論文を完成させ、審査に合格することを目標とする。</p> <p>学校心理学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文を完成させる。ゼミで発表するだけでなく、研究集会やシンポジウムなどでも広く発表を行い、研究成果をチェックする機会を得るとともに、他の研究者の意見をうかがうことで、今後新たな研究を開拓するためのヒントを得る機会とする。</p>	
精神分析学特殊研究指導Ⅰ	<p>後期課程1年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>前期課程を修了して修士論文を書き上げた後期課程1年生が、本格的に研究者を目指し、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、精神分析学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文へとつながる研究を模索しつつ、様々な論文を読んで批判的に検討するとともに、自ら新しい問題を作り出して研究の見通しを立てる習慣をつけるための演習を行う。</p>	
精神分析学特殊研究指導Ⅱ	<p>後期課程1年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>前の学期に引き続き、博士論文につながる研究題材の発見を視野に入れ、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を始める能力を養うことを目標とする。</p> <p>具体的には、精神分析学を専門とする指導教員の指導のもと、さらに様々な論文を幅広く読んで批判的に検討するとともに、新しい問題を作り出し、自らの見通しに従って研究を進め、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
精神分析学特殊研究指導Ⅲ	<p>後期課程2年春学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>1年次に引き続き、幅広い視野と現代的な視点をもって研究活動を進めながら、博士論文につながる研究題材を次第に絞っていくことを目標とする。</p> <p>具体的には、精神分析学を専門とする指導教員の指導のもと、研究分野をある程度絞り、関連する研究論文を深く掘り下げて読みつつ、先行研究に残された研究課題を見出す。その上で見出した研究課題においてより深い問題を作り出し、独自の研究を行い、査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	
精神分析学特殊研究指導Ⅳ	<p>後期課程2年秋学期に開講されるゼミナール形式の授業である。</p> <p>前の学期に引き続き、博士論文で取り組む研究分野や研究課題を絞り、本格的に学位論文作成へとスタート準備を整えることを目標とする。</p> <p>具体的には、精神分析学を専門とする指導教員の指導のもと、最終的に博士論文で取り組む独自の研究課題を決定する。関連する研究論文を参考にしつつ、博士論文につながる視点を定めるとともに、研究の見通しを立てて独自の結論を見出すことを目指す。博士論文にとどまらず、新しい研究を査読付き研究論文として投稿・発表する。</p>	

<p>精神分析学特殊研究指導V</p>	<p>後期課程3年春季学期に開講されるゼミナール形式の授業である。2年次までの研究の進展を受け、研究課題の妥当性を吟味しながら博士論文を作成することを目標とする。 具体的には、精神分析学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文の執筆を進めるとともに、研究成果については積極的に研究集会で発表し、他の専門家の意見を仰ぐようにする。そのような活動を通して博士論文の質が一定水準以上になるように上げていくことを目指す。</p>	
<p>精神分析学特殊研究指導VI</p>	<p>後期課程3年秋季学期に開講されるゼミナール形式の授業である。これまでの研究成果を盛り込んだ博士論文を完成させ、審査に合格することを目標とする。 精神分析学を専門とする指導教員の指導のもと、博士論文を完成させる。ゼミで発表するだけでなく、研究集会やシンポジウムなどでも広く発表を行い、研究成果をチェックする機会を得るとともに、他の研究者の意見をうかがうことで、今後新たな研究を開拓するためのヒントを得る機会とする。</p>	

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 専門職大学等又は専門職学科を設ける大学若しくは短期大学の授業科目であって同時に授業を行う学生数が40人を超えることを想定するものについては、その旨及び当該想定する学生数を「備考」の欄に記入すること。
- 3 私立の大学若しくは高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。